

前田綱紀時代の加賀藩資料に見える能楽

棚 町 知 彌 江 口 文 恵
入 口 敦 志 佐 藤 和 道
竹 本 幹 夫 青 柳 有利子

はじめに

本稿は、日本古典演劇コース能楽部会の内、加賀藩能楽関係資料研究会での研究報告である。この研究会は、棚町知彌氏・入口敦志氏のご指導により、特別研究生が参加して月例で行われている。今回報告するのは、二〇〇六年度の輪読分の内、C O E客員研究助手の江口文恵、特別研究生の佐藤和道・青柳有利子の担当分である。二〇〇六年度は、棚町知彌氏が調査された、金沢市立図書館近世資料館加越能文庫所蔵文書中、『元禄五年同六年雜記』（本稿記事見出し）^{【1】}内の番号で1とある分）、『日用雜記』（同じく2）、『元禄七年雜記』（同じく3、7）、『元禄七年同八年雜記』（同じく8）、『元禄八年同九年雜記』（同じく10）の内、とくに能楽に関連する記事を中心に抜き出したものを輪読した。今回紹介するのは、そのうちの一部であり、能楽関係記事を含むが今回は紹介しなかった分や、能楽に全く関連せず、考察の力の及ばない記事を除いた任意の記事30点を抄出し、解説を施したものである。抄出したものの中には、能楽関係記事ではないものも若干含むが、綱紀周辺の人物や文化環境を彷彿させる記事のいくつかを、あえて収録したものである。

加賀藩前田家は、安土桃山時代より加越能三国を支配し、早くから能楽を愛好したが、第五代藩主綱紀時代に、將軍徳川綱吉の能数寄に追従する形で、それまでの金春流に加えて宝生流の能を後援するようになり、綱紀自身が宝生大夫に弟子入りして能を舞い初め、金春流竹田権兵衛弟子であった諸橋・波吉両名を宝生流に転流させて自らの能相手とし、また宝生大夫の息を前田家江戸大夫に任じるなど、加賀宝生の基礎が作られた。江戸時代諸侯の中でも最大級の能楽後援者が、綱紀以後の加賀前田家

であった。

加越能文庫中には、加賀藩能楽の芸事関係資料が豊富に伝存し、それらを踏まえていくつかの先行研究が存在するが、もともと膨大な資料群であるため、その全貌が完全に把握されているわけではない。本研究では、能楽研究者がこれまであまり注目してこなかった加賀藩藩政文書中の芸事関連資料を抄出・輪読してきた。これだけでも膨大であるため、全史料を網羅することはもとより不可能であるが、いわゆる能楽関係資料からはいかがい知れぬ加賀宝生の草創期の様子を克明に捉えうる点は、きわめて貴重である。いずれはこうした藩政文書中の加賀藩能楽資料の網羅にいたる日が来るであろうが、現在は端緒に就いたばかりの段階であり、もとより不十分ながら、あえて資料の紹介をして、加賀藩能楽史にいささかの付加を行うものである。資料の閲覧・複写を許された金沢市立図書館近世資料館に心より謝意を表する。

【凡例】

- 一、本稿で紹介した資料は、すべて金沢市立図書館近世資料館加越能文庫蔵で、そのうち『雜記』と題される資料群の一部を抜き出し、紹介・解説するものである。
- 一、本文の掲出にあたっては、極力原文の姿を生かすことに努めたが、読みやすさの便を考え、句読点を施し、漢字は原則的に新字体に改めた。
- 一、助詞の小書や欠字札の空格などは原文のままとした。後者については、行頭にあつて欠字札が取られていない場合などはそのままにすることを原則とし、また原文に欠字札が取られていない部分も散見するが、それらもそのままに

したため、やや不統一が生じた部分がある。

一、各記事は冒頭に通し番号と小見出しを加え、見出し下【一】内に出典文書名を記し、私意により1-1などと資料番号を付したが、これは原本の函架番号ではなく、コピーの整理上の心覚えである。

一、本稿執筆にあたっては、棚町知彌の指導により、演劇博物館二世紀COE演劇研究センター特別研究生諸君が輪読・調査した資料を原稿化し、それを棚町・入口・竹本の三名で再検した。また参加者全員が原稿を提出したわけではなく、発表はしたが今回原稿化されなかったものもある。それらについては他日を期したい。

以上

1 元禄六年高山在番衆饗応御能拝見に付き御佩刀のこと〔元禄五年同六年雜記（1-1）〕

四月廿二日高山被遣面々御能拝見之刻被 仰出

一、御自身御能之刻、只今迄ハ御舞台ハ御腰物出候得共、今日ハ御刀御脇指共御幕之内物見之窓之方為持置可申候。御舞台御供ハ御番頭御横目之内二人、右近新藏内一人、百助杯内一人、可罷出候。御番頭御横目隙差合、兩人難罷出時分者右近新藏兩人共可罷出候。菟角四人充可罷出旨被 仰出。

飛騨高山在番衆の御能拝見に際し、これまで綱紀が能を舞う時には、佩刀を舞台に出していたが、今日は大小の佩刀は、揚げ幕の内の物見の窓（嵐窓、奉行窓ともいう）のあたりで持たせ待機させること。舞台の御供には、奥小将番頭・奥小将横目中などから都合四人出るべきであるとの通達である。

高山在番は、元禄五年八月廿二日、飛州高山城主金森出雲守頼岩が出羽国上之山へ国替えになったことにより命ぜられたものである。『加賀藩史料』所引『政隣記』には以下にある。

一、八月廿二日御老中戸田山城守正昌殿より聞番三好助左衛門御招、直に被仰渡候者、飛州高山城主金森出雲守頼岩儀、出羽国上之山へ所替被仰付、則引弘被申候。依之飛騨高山城明候條、隣国之儀に候條在番人可被遣候。大勢不及被指遣候。

一万石積り人数・弓・鎗・鉄砲等可被遣候。（以下略）

また、翌元禄六年三月には、半田惣兵衛に交替の命が下るも、惣兵衛が固辞したため、藤田平兵衛が赴くこととなった。

三月九日白書院杉戸の内年寄中列座、月番因幡、半田惣兵衛景弼え被申渡趣。恒川七兵衛・大橋長兵衛罷出る。

高山在番へ被遣候人数等申上候趣、不宜被思召候間、惣兵衛儀高山へ被遣間敷

候旨。依之先自分に御番等遠慮可仕候。但組中触遣等、御番指引儀も、惣兵衛同役御用番より相達可然候由。（『参議公年表』）

四月七日、半田組の面々、今般藤田召連高山在番に依て、右組の面々自分組同事に可存旨、藤田に被仰渡、組の者も無異心藤田下知に可随の旨、於竹の間被仰渡、各登城。（『参議公年表』）

一、二月高山在番永井織部爲代、半田惣兵衛可被遣旨被仰渡候處、子細之事共有之候而、惣兵衛被遣間鋪旨三月八日に被仰渡、惣兵衛代藤田平兵衛可被遣候。組は惣兵衛組可召連被仰渡。四月廿二日在番之人々御歩以上御饗膳被下、御能拝見被仰付、御前にも二番御舞。廿四日御條目等御渡、拝領物被仰付。翌廿五日発足之処、一日逗留有之。廿九日高山着。晦日交代相済。（『政隣記』）

この能は、在番衆交代の際の饗応に、綱紀自らの能を家臣に拝見せしめたものである。通常は佩刀を持たせて舞台に出るのが大名の能のあり方であったことがわかる。「御舞台御供」とは、後見のような形で舞台上に控える者をいうのであろう。高山への在番衆赴任の行軍については、「演劇研究センター紀要Ⅶ」所収「前田綱紀と加賀藩の能―前田綱紀書簡抄―」の資料「1」中の「加陽細工所始末」にも触れられている。

資料中、右近とあるのは奥小将であつた生駒右近であろうか。新藏も同じく奥小将の葛巻新藏と推測される。葛巻新藏は、宝永七年に大野木克明と名を改めており、『筆叢』、『閑窓記』、『警語傍文』、『和漢諸士訓戒』、『山中湯治日記』等の著作を残している。『加能郷土辞彙』また、弟の葛巻権左昌信は、高山在番を固辞した半田惣兵衛の赦免嘆願を行い、蟄居処分となつた。新藏も連座し遠慮処分となつてゐる（『政隣記』同年六月十一日条）。

2 (同年か) 五月三日付書物奉行・儒者への通達〔元禄五年同六年雜記（1-1）〕

五月三日

一、御書物奉行并五十川剛伯・室新助、御文庫之御書物一二冊充差上申儀有之候。左様之時分御書物箱之蓋など三人差上候者、能掃除いたし御書物よこれ不申様可仕旨被 仰出。深尾七之助・五十川剛伯・室新介申渡之。

書物奉行や五十川剛伯、室新助が綱紀の命により、御文庫の御書物を少数数出納する場合、書物箱の蓋に載せるのであるが、箱をよく掃除して書物が汚れぬようにせよとの通達である。書物奉行は、延宝年中に、西坂猪之助・不破小左衛門・沢崎清助・山崎吉左衛門・寺西又八に小原惣左衛門を加えて六人在役した（『加能郷土辞彙』）とされるが、ここでは深尾七之助がその役であらう。

五十川剛伯、室新助はともに儒者。五十川剛伯は、字は洛之、鶴皋と号した。寛文

八年七月に三十人扶持、銀三十枚となり、朱舜水の許で勉強した。延宝三年には禄三百石で加賀藩の儒員となったが、元禄十一年十二月に子源一郎の贖銀の罪に連座して流罪となった。『加能史料』には、寛文十一年の由緒書が見える。

また、室新助は、鳩巢の名で知られる。寛文十二年に加賀藩に出仕、木下順庵門下となり、貞享元年には一五〇石を給された。正徳元年に、新井白石の推挙で幕府儒員(二〇〇石)となった。『徳川実記』、『政隣記』には以下のようにある。

三月廿五日 松平加賀守綱紀が家人室新助直清めし出されて儒員に加へらる。(『徳川実記』)

三月十五日 御儒者室新助直清字は師礼を、従將軍家被為召、為朝鮮使之接待。是天和中木貞幹を徴す古事を用て也。但新助二百石也。今月廿三日 江戸参着。(『政隣記』)

3 (同年か) 五月十日付御能かざし文句心得【元禄五年同六年雜記(1-1)】

五月十日

一、御能之時分或半部夕顔之内、其比源氏の中將と聞えし与申所など必うたひ替申間鋪候。或清経之内、是ハ中將殿の黒髪など、申様なる所ハうたひ替可申候。ケ様ノ所難心得候ハ、相伺可申旨被 仰出。和田小右衛門御細工奉行申渡之。

能における所謂かざし文句についての通達である。前田綱紀は、承応三年閏十二月に左近衛權中將となつてゐるが、それを憚つて、謡曲の文句の中で、単独で「中將」とある部分のみを変えて謡うようにとの通達である。「半部夕顔」は、「半部」の古名で、「その比源氏の中將」は、「クセ」の冒頭の文句。また、「これは中將殿の黒髪かや」は、『清経』第三段の「クドキ」に見える。

また、『統漸得雜記』、『国事雜抄』にも同様の史料が見える。

一、御能半部、源氏の中將と申事直し申間敷候。惣而何々の中將と申類は、其儘謡可申候。清経には是ハ中將殿の黒髪と申類は、必謡替可申候。権兵衛・喜太夫等勤申時分は、人々流に候條各別に候。尤難心得儀は相伺可申旨被仰出候。元禄六年五月十日 (『統漸得雜記』)

謡曲に中將与申事避不避事

御能半部源氏の中將と申事直し申間敷候。惣而何々の中將と申類は其儘謡可申、清経には是ハ中將殿の黒髪と申類は、必謡替可申候。権兵衛・喜太夫等勤申時分は、人々流に候條各別に候。尤難心得儀者相伺可申旨被仰出候趣、則何も申渡候。其外御書出之趣畏奉り候、以上。

西五月十日 和田小右衛門 関谷市右衛門 大河原八郎左衛門 (『国事雜抄』)
和田小右衛門正辰は、金沢町奉行(七百石)。元禄六年六月二十八日には、御算用場奉行に任じられてゐる。また、『国事雜抄』に見える、関谷・大河原両名が、御細工奉行である。『菅網記』には、

貞享四丁卯三月十九日新に命細工奉行ノ料知百石列ノ次小將横目ノ大原八郎左衛門・伊藤仁右衛門・関谷市右衛門。

と記されている。細工奉行は、御武具方・御細工方・御弓方・御鉄砲方の四職を統括する役であつたが、細工所は、本芸とは別に、能を兼芸する者が多く、これらの役者の管轄も行つてゐたらしい。細工所の兼芸については、「前田綱紀の能稽古と兼芸のはじまり」(『加賀藩御細工所の研究(二)』所収)に詳しい。

4 (同年か) 五月十日付進物心得【元禄五年同六年雜記(1-1)】

五月十日

一、去冬寒向候より仕候新申海鼠出申旨、杉江助四郎言上候處、正月時分ハ不宜候哉之旨 御尋之處、何も様子覚不申旨申上ル。重而其心得可仕旨助四郎申渡之。

「申海鼠(クシコ)」とは、「能登の産を名物とし、その精製して幕府が長崎に輸出したのは、鹿島郡小嶋・津向・三室・日出ケ島・野崎・向田・祖母裏・曲及び鳳至郡中の十浦で捕獲するもので、七尾の塩屋清五郎が一手に取り扱つた。大海鼠を鍋で煎りあげたものを煎海鼠(イリコ)といひ、煎海鼠を縄でひとつにつないだものをぶらこといふ。申海鼠は串にさして干したものの。縄海鼠は申海鼠とし難いものを縄に通して干したものの。(『加能郷土辞彙』)とある。また、『日本山海名産図会』によれば、「腹中三條の腸を去り、数百を空鍋に入れて、活火をもつて煮ること一日、則鹹汁自出、焦黒燥硬く、形微少なるを又煮ること一夜にして、再び稍大きくなるを取出し、冷むるをうか、ひ、糸につなぎて乾し、或は竹にさして乾たるを申海鼠といふ。また大なる物は、藤蔓に繋ぎ懸る是江東及越後の産かくのごとし」とある。清国との交易品の一つ。

杉江助四郎については、不明であるが、『寛文十一年侍帳』に「八百石 小姓組 会所奉行 四十四 杉江兵助」の名が見え、やはり会所奉行であろうか。

5 (同年か) 五月十一日付初物到来に際しての心得【元禄五年同六年雜記(1-1)】

五月十一日

一、初物出来次第達 御聴申義、吟味等不仕先早速可申上由被 仰出。御膳奉行中申渡之。

初物が到来した時は、吟味する以前に先ず綱紀に報告せよとの内容。御膳奉行は、「寛永八年渡辺清右衛門の命ぜられたのが始であろう。次いで十六年に板津兵助、二十年河野四郎左衛門、明暦二年岡田五郎右衛門、寛文六年改田平左衛門が逐次命ぜられ、貞享以来は三人となり以来連綿した。藩侯膳部の献立は御膳奉行之を作り、御看板に記して御近習勤仕の頭取に渡し、頭取は之を御居間に持参して読み上げ、仰出されを待つて御膳奉行に下付するのであるが、何の命もないのが普通であった。〔加能郷土辞彙〕」とある。

6 (元禄六年) 癸酉五月十六日付御能方心得通達【元禄五年同六年雜記(1-1)】

五月十六日

一、最前御能之時分、中入後拍子方シテノ装束出来ヲ待合不申拍子可申候。相待可申旨 御好有之ハ各別、左も無之候者何程も拍子可申候。左様之所難勤ハ不達而與申物候。常々其心得可仕儀之由被 仰出置候処、昨十五日宝円寺如来寺瑞龍寺天徳院看坊、御拝領物拝見被 仰付候時分之御能、高野物狂中入之後待合申候付、吟味可仕旨被 仰出候処、喜大夫心得違、拍子方申合爲待申旨言上付、向後之儀若年寄中迄被 仰出。其趣左之通御請上之。

御能之時分、中入後拍子方シテ装束不待合拍子可申旨被仰出置候処、高野物狂待合申候。重而待合候者不届可被 仰付候条、権兵衛喜大夫初、急度(下文的見せ消原文、可申渡置旨被 仰出) 承知仕候様町奉行御細工奉行可申渡旨被 仰出之趣、若年寄中申渡之候。以上。

癸酉五月十六日 葛巻新蔵判

以前、能の中入り後(後場の冒頭)には、綱紀より特別の指図のない限り後シテの装束着用完了を待たずに離し始めるようにとの通達をしたが、御拝領物拝見能の時に、高野物狂を演じた諸橋喜大夫がこれを心得違ひして、後シテの装束着用完了を待つて離させたことに對する再度の注意である。この時の能について、『金沢の能』には次のように記されている。

翌月十五日に、宝円寺・如来寺の住持を招いて、拝領の御筆の絵、丁字釜、料紙箱、硯箱を見せて能があった。藩侯は、「半部」、「邯鄲 夢之舞」を演じたが、喜大夫の高野物狂の折、間狂言がすみ次第、拍子方は待たず、六之進が一セイを打つべきところを、なぜ待ったのかと尋ねられ、囃子方では、喜大夫が待ち合はすように指示したからで、殿様の能の時に待つのかと思つたと答えている。

〔高野物狂〕は、「中入大小送り込ミ(間狂言無シ、直チニ脇ノ次第ニナルモノ)」で、「後段ノ出」は、「為手中入スルト、スグニ次第」(以上「要技類從」)となる演出であり、

通常後シテの出を待つものではない。

なお將軍家よりの拝領物披露能は、度々催されている。『加賀藩史料』所引『政隣記』には以下の通り。

(元禄五年) 十二月十五日(略) 於江戸段々結構成御仕合、品々御拝領被遊、御姫様御縁組被仰出、諸太夫も被仰付。依之明後十五日御拝領物拝見被仰付、御能被仰付、御料理可被下候由御意に候事。(中略) 御上段間御襖障子明、四五人程宛罷出、御道具、御絵・御句釜・箱・御硯箱・御御料紙香炉也。上段御床の上に有之、拝見。御能暮頃相済。

(元禄七年九月) 十八日御能被仰付、このたび御拝領之品々御飾、宝円寺・隨龍寺・如来寺御招請拝見被仰付。其次天徳院看坊並会下長老中、二之間御敷居際え出拝見被仰付。三寺和尚並長老中三汁十菜御料理、御広間上之間より二之間懸列居被下之。給仕御大小将、平僧は桜之間に而二汁七菜御料理被下之。(『政隣記』)

この時招請された寺院のうち、如来寺は天正年間に岌台文公によって越中増山に創建された浄土宗寺院で、寛文二年に現在の地に移転されたもの。宝円寺は、越前高瀬の同名寺院から前田利家が分立・創建した寺院で、金沢における前田家最初の菩提寺である。天徳院は、元和九年に加賀藩三代藩主前田利常夫人の菩提所として建立され、宝円寺とともに、曹洞宗の触頭を務めた。

また、喜大夫は、諸橋喜大夫である。諸橋氏は、富樫氏時代からの能大夫であり、その祖甚吉については系図に「諸橋甚吉。元祖以来相馬氏にて罷在、家の定紋は、則繫馬に而御座候。代々能登国諸橋村に居住罷在、能之流儀は金春流執行仕罷在候。其頃能州珠洲郡正院村八幡宮に、能登国太平の神事能有之、前々より甚吉義頭取相勤仕来候。其頃所々祭礼能相勤申候。然処何れの代に候哉、富樫左衛門殿へ被召抱、扶持給り候。甚吉・能太夫四人有之、以上五人の列頭に被申付候。(『加能郷土辞彙』)」と記されている。同様に『国事雜抄』には、「諸橋権之進家伝」として、

一、私先祖能州諸橋と申処之者に而御座候処に、富樫殿へ被召出、御扶持被下候由。其外能太夫四人御座候内、諸橋を五人之座頭に被仰付、則富樫殿御家之御紋被下、於今七曜之紋、翁は子に付置申候事。(以下略)

と記されている。また、諸橋氏は元来金春流であったが、貞享三年閏三月に前田綱紀の命によって宝生流に転流した。加賀藩史料所引『政隣記』には、貞享三年四月三日条に、

公御能被遊候に付、卯刻迄御登城、(中略) 多賀新左衛門直方、生駒右近直政、御櫓役辻市右衛門重賢、聞番土方勘解由氏陳樂屋御供。且下馬より御玄關迄之御供を兼て勤之。御下之節右近御腰物役、新左衛門、市右衛門共に御玄関え出、頭分御供之通罷在。右四人之外御樂屋え、竹田平四郎御櫓役、御先え御装束御長持に入罷越、

右四人之待分え加り御楽屋御供之分也。以上五人は戸田山城守殿え御尋相極而、各装束服紗布上下着用。諸橋市十郎は、宝生九郎才覚を以、御供与無之参上。(中略)已刻御能始而、二番目桜川公被遊、為御後見宝生九郎・竹田平四郎、橋掛より御供罷出。御出帰之時分は、九郎は切戸より出、平四郎迄橋掛より御供に出。と記されている。

また、竹田権兵衛家は、金春七郎氏勝の三男、安信を祖とする金春大夫家の分家で、加賀藩能大夫。当時の当主は安信の息、平四郎広富。

7 (元禄六年か) 四月付竹田権兵衛書付・御役者之覚・日付不明御役者并御徒御無用之者御細工者書付【元禄五年同六年雜記(1-3)】

要脚広蓋

太夫

脇

太夫童子

今春八左衛門
大藏太夫

此兩人子細

有之此所へ

罷出候

笛

小鼓

大鼓

太鼓

狂言師

地謡

右之通覚申候。以上。

四月十日 竹田権兵衛

(改丁)

御役者之覚

一、三百石 竹田権兵衛

一、拾人扶持 竹田庄五郎

一、判金五枚五人扶持 春藤勘右衛門

一、同五枚 春藤万右衛門

一、同五枚 石井仁兵衛

一、同五枚三人扶持 藤本太左衛門

一、判金四枚 山本市左衛門

一、同五枚 小寺金七

一、同五枚 糟谷次郎兵衛

一、同五枚 中林七左衛門

一、同四枚 石井孫兵衛

一、同四枚 杉長左衛門

一、同四枚三人扶持 松井十左衛門

一、同三枚 平井伝右衛門

一、同三枚 山本清三郎

一、同三枚 山本甚右衛門

一、同四枚 大藏金右衛門

一、同三枚 馬場弥市郎

一、同三枚 中村吉左衛門

一、同三枚 石崎伝五郎

一、判金三枚 宮川七郎兵衛

一、同三枚 伊東八十郎

一、同四枚 藤田太右衛門

一、同式枚 武部理右衛門

一、同式枚 平井才兵衛

一、式拾五人扶持 諸橋喜大夫

一、拾人扶持 波吉左平次

一、五人扶持 竹中甚助

一、三人扶持 菅浪屋次郎三郎

一、三人扶持 高屋五郎兵衛

一、三人扶持 北村屋円七

一、三人扶持 袴屋伝七

一、三人扶持 額見屋四郎兵衛

右之通御座候。以上

四月十二日 和田小右衛門

(以下余白・改丁)

御役者 并御徒・御供用之者・御細工者

仕手

竹田権兵衛 諸橋喜大夫

波吉左平次 竹田庄五郎

波吉陸之丞

仕手連

上原明石之助
平井伝右衛門
橋爪屋新右衛門

松井十左衛門
若狭屋八之丞

子方

清水勘十郎
宮川権之丞

藤田小源太
狩野小平太

ワキ

春藤万右衛門

山本清三郎

山本平三郎

竹中甚助

竹中甚左衛門

竹中梅之丞

ワキツレ

岩崎半七

宮河七郎兵衛

春田屋治平

角屋甚右衛門

角屋惣四郎

福井屋理兵衛

春田屋半九郎

銭屋三郎兵衛

笛

山東作左衛門

中村牛之助

奥津文平

山本平八

杉長左衛門

山本甚右衛門

京屋五郎兵衛

京屋市十郎

小鼓

隱岐六之進

加藤惣十郎

畑半十郎

糟谷次郎兵衛

糟谷伝次郎

中林七左衛門

脇本助之丞

二口屋九右衛門

大鼓

加藤市之丞

加藤勘左衛門

加藤久四郎

北嶋彦三郎

石井孫兵衛

菅波屋二郎三郎

北村屋八兵衛

田上屋善七

太郎田屋次郎七

太鼓

北嶋金助

中上権六

藤本太左衛門

小寺金七郎

小寺長五郎

小寺与三次郎

北村屋円七

氷見屋太郎左衛門

地謡

渡部甚五右衛門

池野弥市右衛門

斎藤善助

市川平右衛門

太田清兵衛

土山惣三郎

高橋吉大夫

雪野友之丞

中村助太夫

金子喜平次

伊藤八重郎

袴屋伝七

額見屋四郎兵衛

油屋伊兵衛

菓子屋孫右衛門

野々市屋四郎兵衛

紺屋伝右衛門

狩野平右衛門

清水谷屋七兵衛

表具屋孫三郎

袴屋武兵衛

砌屋八右衛門

中条屋八郎兵衛

狂言師

大藏金右衛門

馬場弥市郎

中村吉左衛門

石崎伝五郎

山上屋旦兵衛

鞘師長左衛門

紙屋又右衛門

袴屋左平

柄巻屋太兵衛

装束方

中村団七

松本与四兵衛

藤田太右衛門

武部理右衛門

平井才兵衛

大野屋久兵衛

鮎屋加兵衛

御貸装束方

金子喜左衛門

中村新五兵衛

水谷金右衛門

不嶋源六

本資料は大きく三部分に分かれる。まず第一部は「要脚広蓋」で始まる竹田権兵衛（広富。宝永五年没）の四月十日付「寛」。幕府での出来事を報告したものと思われる。広蓋（容器）に載せた褒美を与えられた能役者を列挙しているが、「太夫」は、後出の

鹿子（ここでは分家の意）今春八左衛門・大藏太夫とあることや竹田権兵衛の見聞である点から金春大夫（八郎元信、元禄十六年没）であろう。ちなみに「今春八左衛門」は金春安成（元禄十年没）、「大藏太夫」は大藏経喜（元禄十一年没）。

このときの能に出動した役者ではないが、「子細」あつて鷲仁右衛門（宗悦、元禄七年没）、大藏弥太郎（縁虎、宝永二年没）も列席したとある。

第二部は「御役者之覚」。藩から禄を貰っている役者三十三名の禄高及び氏名を列挙する。別表Ⅰを参照のこと。前半は京都および江戸在住の役者二十五名。江戸在住分は藤本太左衛門（観世流太鼓）・松井十左衛門（宝生流ツレ）の二名であるが、兩名ともに加賀藩の抱え役者で五座所属の役者ではなく、綱紀に従って江戸住みをしたものである。あるいは江戸の家元の内弟子から綱紀に奉公した者かも知れない。春藤勘右衛門（ワキ）、石井仁兵衛（太鼓）、山本市左衛門（笛）以外は次の「御役者 并御徒御算用之者御細工者」にも重複する。一行空けて金沢の御手役者及び町役者計八名を列挙する。金沢の役者の禄高は判金ではなくすべて人扶持。全員「御役者 并御徒御算用之者御細工者」に名前が見える。報告している和田小右衛門正辰は3に見える加賀藩奉行。

第三部は「御役者 并御徒御算用之者御細工者」。加賀藩御手役者一〇四名を役ごとに列挙する。内訳は京都・江戸の役者、金沢の御手役者、御徒、御細工者、町役者など。別表Ⅱ参照。

シテ方は昔から加賀藩に仕える金春流竹田家と、他流から転流した宝生流の役者の二流であるので、ツレ・地謡方もこの二流のいずれかであるが、京都役者は金春、金沢の役者は宝生に大別できよう。流儀に偏りのある役も多く、狂言方はすべて大藏流であり、和泉流のお抱え役者の名前が見えるのは江戸後期以降のことである。ワキ方は春藤流、太鼓方も恐らくすべて観世流であろう。なお、加賀藩と密接な関係を持った大鼓金春流の名前は当該資料には見えないが、元禄七年以降の資料にはその名が管見に入る。後出の資料を参照されたい。

御細工者の兼芸も目立つが、担当する役はワキツレ・子方・囃子方・地謡・装束方（物着）・御貸装束方に限られている。地謡方の御細工者がワキを勤めた記録は後出の記録に散見するが、シテ・ツレ・狂言方を勤めた記録は管見に入らない。子方の御細工者清水勘十郎も後年囃子方に転向している。兼芸があくまでも藩主の稽古や能の興行の補助であつたことがわかる。なお、細工者の本業は、紙細工・竹細工・針細工・絵細工・漆細工・小刀細工など多岐にわたっているが、装束方・御貸装束方がほぼ針細工職人であるのは本業を生かした兼芸と言えるだろう。

8 年不明八月廿三日付上原明石之助稽古外出心得につき通達【日用雑記（2-3）】八月廿三日

一、上原明石之助松井十左衛門へ連之仕廻謠等稽古仕付、十左衛門方へ明石之助指遣申時分之事。未前髪も有之者之儀候得者、御足輕之内究置指添遣申度旨、神尾孫九郎相伺申候処、ケ様之儀足輕指出可申事而無之候、明石之助ハ御徒組之事候へハ、御徒之内明石之助親（親類無之）念頃咄申候者有之候者、左様之者又小頭など召連申候、其内十左衛門御屋敷へ罷越候時分、御長屋へ相招、小頭共参会稽古為仕候者可然候。又若年寄中などへ相達得、御内意候者、御屋敷へ十左衛門被召寄、御座敷之内敷、不然ハ御楽屋など而成共けい可被、仰付候。御足輕之召使様、ケ様之事仕なし候故、皆つかいづしと申物罷成、御人不足之様皆々申候。右之様成事共御吟味有之候者、何程も足輕出可申候。或ハ御近辺罷有申候者など何方へか稽古等被遣、從、御前縮被、仰付筋候へハ御横目足輕、重キ時者御徒横目被遣而可有之候。又御小將共などイツレへか罷越候時分、召連候若童不足仕、御貸人被、仰付など、申ハ御足輕相応候。明石之助ハ又左様之並而無之候。され共此度之事ハ如何様も可仕候。是計御改被成候とても埒明申事而無之候。此段若年寄中へ可申聞与被、仰出。前田対馬・多賀信濃・玉井勘解由へ申渡之。

役者が稽古に行くときのツレ役者上原明石之助はまだ若いので供の者に足輕をつけて同じくツレ役者松井十左衛門のところへ稽古にいったところ、上原は御徒者であるのでそれは不相応だという注意の申し渡し事項。足輕を能の稽古に同伴させるような用件に使うのは「つかいづし」（本来の用途とは違う使い方をすること）であり、人手不足となつてしまふので今後は改めるように若年寄三名に伝える。松井十左衛門・上原明石之助ともに7のシテツレの項目に名前が見える。

9 元禄七年正月年賀規式抄出【元禄七年雑記（3-1）】

……已后剋御帰館。從大御式台入御、御供奥村老岐直輝・前田対馬孝行・多賀信濃直方・玉井勘解由貞信・永原治兵衛政張・葛巻新藏克明（行前）（御先立前田孝行）御乗輿之戸葛巻／克明／役之。年賀御札之輩数多於御通達御札。竹間、役者宝生吉之助・諸橋喜太夫・波吉陸之丞・松井十左衛門・山本清三郎・藤本太左衛門・中林七左衛門・馬場弥市郎・石崎伝五郎。隔席列居而後藤悦乗・同理兵衛・本阿弥久右衛門等。暨諸町人於拭板雜居（献上物／前置之）。一同拝伏。不破彦三為貞披露之。於大御料理之間・二之間、御馬廻組外、御射手・御異風・御馬役・御徒小頭・御算用者小頭・御細工者小頭・与力一同御目見。……

元禄七年正月のもの。原文は長大なので、役者名の出てくる部分のみを抄出して掲げる。なお同雑記中に続けて、字配りまでは同一の控えも存在する。

綱紀は、土屋相模守政直（老中）、牧野備後守成貞（側用人）、柳沢出羽守吉保（同上）、本庄因幡守宗資らの許を訪れている。このとき綱紀の供は、奥村老岐直輝（家老）、前田対馬孝行、多賀信濃直方、玉井勘解由貞信、永原治兵衛政張（以上若年寄）、葛巻新藏であつた。

帰館と同時に待ち受けていた年賀の衆の拝礼を受け、まず竹の間に能役者が参上している。宝生吉之助は、綱紀の師、宝生太夫将監友春の次子であり、宝生家分家の宝生嘉内家の祖となつた人物であつた。加賀藩では十五人扶持を与えて、江戸における御手役者の首座に置いた。以下は6に既出の加賀藩お抱えの御手役者である。諸橋喜大夫、波吉陸之丞は、シテ方宝生流である。波吉は、元禄十三年六代右内信重の代に宝生流に転じたとされ、当時はまだ金春流であつたかもしれない。松井十左衛門は宝生流ツレ役者、山本清三郎は金春流ツレ役者、藤本太左衛門は観世流太鼓方、中林七左衛門は観世流小鼓方、馬場弥一郎は大藏流狂言方、石崎伝五郎は大藏流狂言方である。

拭板（板敷きの通路）に伺候する後藤悦乗・理兵衛は白銀師。両者共に、在京で下後藤姓を名乗り、上後藤の演業と隔年交代で金沢に留まつていたらしい。本阿弥久右衛門は、不明であるが、前田利常の代には、刀剣役に本阿弥光甫の名が見え、その縁類であろうか。これらの面々の献上物を、不破彦三為貞（奏者番）が披露した。

大料理之間、二之間に伺候するのは馬廻、射手、異風、馬役、徒組の各兵士を統率する組頭、算用場、御細工所の組頭、与力である。以下記名があるが、割愛した。なお以下本文は割愛するが、奥料理之間には、絵師が伺候し、不破為貞が献上物を披露した。祇候した狩野伯田景信（方信）・狩野春悦重信・狩野即誓種信・狩野素仙成信は、狩野宗巴の系統で加賀藩お抱えの絵師、一説に、伯田・春悦・素仙は兄弟、また素仙は、伯田の次男という。元禄四年には、駒込邸中屋敷の能舞台の鏡板を書くことを狩野伯田に命じている（『葛巻昌興日記』）。長岡炉裏之間には、奥小將・御医者・御茶道坊主らが列居し、有賀正寛が献上物を披露した。そこに名の見える松山検校は平家、室新助直清は室鳩巢、田中友松は一閑。宗佐の子である山家宗朴は、茶室頭を務め加賀藩の茶室に重きをなした人物である。奥居間には、本多弥兵衛政法、横山左門元知、前田帯刀孝始、木下平之丞（順庵）らが伺候し、御奥書院御勝手にて、お目見えがあつた。不破為貞、笹原一致が各々の献上物を披露している。本多、横山（四千五百石）、前田（二千五百石）はいずれも旗本。木下順庵は、著名な儒者で室鳩巢の師に当たる人物。加賀藩からは二〇〇石を給された。対面の後、綱紀は、一旦御居間へ下がつたが、飛騨守の御出のため再び奥書院で対面した。飛騨守は、大聖寺藩第三代藩主前田利直で

ある。

10 元禄七年四月付浅野家との結納関係書付【元禄七年雑記（6—1）】

四月廿五日

一、明日御講釈御能之儀三付、彼は山城守殿へ御伺被成義なと有之、今朝山城守殿へ御越被成候。右之御次而、廿九日御結納御取かわし被成候儀被 仰達、御肝煎之儀をも御相談被成候處、御婚禮追付と申しても無之、唯今御肝煎相究申候而も、其内御役替等にて、其時御肝煎成不申儀も可有之候。其上御内輪にて候儀御座候へ者、此度御肝煎之御方御究被成候、御無用被成、御婚禮之時至御究御尤御座候由、山城守殿御指図被成候。右之通候故、弥此方之御肝煎無之候間、此通申上候様、与三兵衛・安左衛門内一人、あなたへ罷越、三左衛門へ可申間候。安芸守様大久保殿へ御結納之儀被仰入候哉、相尋可申旨、被 仰出、与三兵衛・安左衛門迄申間候處、安芸守様にも今日外之御用有之、大久保殿へ御越被成、御結納之儀も被仰入候由、先日三左衛門申候由申上候事。

四月廿七日

一、来月廿九日、岩松様より御結納之御祝義被進候。岩松様之御事候故、御肝煎衆無之、依而今日為御使者近藤空右衛門を以、明後日御節様へ岩松様より御結納之御祝義被進由、安芸守様より御口上。空右衛門ふくさ給布上下、四つ半時参上、野村与三兵衛・塩川安左衛門ふくさ給布上下にて罷出、御広間へ誘引、奥村老岐・前田対馬ふくさ給布上下にて罷出ル。二汁七菜之御料理出ル。土方勘解由、相伴御通御小性。昨日御講釈御拝聞・御能御拝見三付、為御礼今朝御登 城御留守故、空右衛門御目見無之、右之趣参上候者可申間旨、今朝被 仰出、御帰館以後安芸守様へ為御礼、前田対馬被遣之。

安芸広島藩嗣子浅野岩松（後の五代藩主吉長）と綱紀息女節姫との結納に関する一連の資料の一部。將軍綱吉の御講釈拝聞・御能御拝見につき、老中との打ち合わせの際に、浅野家との結納に付き、肝煎り（媒酌人）を老中に依頼しようとした件に始まる一件書付。

二十五日条は、翌二十六日に予定されている御講釈拝聞・御能御拝見の儀につき老中戸田山城守忠昌に面談のついでに、二十九日の浅野家との結納取り交わしについて報知し、前田家側の肝煎り役のことを依頼したが、婚禮の直前までは無用との指示があつた。家臣両名のどちらかに、安芸守（吉長父の綱長）方の対応を伺わせようとしたところ、実は本日安芸守も老中大久保忠朝邸訪問のついでにその件について申し合わせ

る予定であると、かねて浅野家方より報知があった由、兩名の報告があったとのこと。

二十七日条は、二十九日の結納の前触れのため、近藤左右衛門が使者として参上したことを記す。野村与三兵衛と塩川安左衛門が左右衛門を広間へ案内し、奥村壱岐と前田対馬が左右衛門を饗応した。綱紀は前日の御講釈拝聞と御能拝見の御札に登城中であるため、左右衛門との対面がかなわぬ由を伝言して登城したが、綱紀帰館の後に前田対馬が答札に浅野家に参上した。なお二十九日条には、結納の使者が参上し、料理、盃事の首尾を本田弥兵衛、横山左門が取り持ったことが記されている。

節姫は、延宝八年十月十四日生まれで当時十三歳。浅野吉長に嫁して安芸御前と称せられた。享保十五年廿九日に、五十一歳で没した(『加賀藩史料』、『続漸得雜記』には、

一、松平安芸守殿吉長の御内室は、加賀宰相綱紀卿の御息女也。生得武勇の心ある女性にして乗馬・打物に達し、殊に長刀鍛錬の聞えあり。被召仕女まで皆々勇気たくましく、誠に一騎当千の女ともいふべし。(以下略)

と記されている。

『岩松様』とは、広島藩中興の英主ともいわれる浅野吉長の幼名である。天和元年生まれで当時十二歳。また与三兵衛は野村重徳、安左衛門は塩川久貞とともに加賀藩の家臣。

なお、節姫の婚礼は、元禄十二年十一月二十一日に執り行われたことが『加賀藩史料』所引『政隣記』に見える。

十一月廿一日節姫様、安芸守様御嫡備後守吉長公え御婚礼。午上刻御出興、左衛門・壱岐子持筋謁熨斗目・長上下・頭分同断半上下、待分無地謁のしめ半上下、御歩服紗小袖花色上下に而御供。双方御取持西丸御留守居中根平十郎殿・上田周防守殿。御迎浅野佐渡守殿・小笠原遠江守殿。御送飛騨守様・長門守様。御興副横山左衛門、御貝桶副奥村壱岐、此兩人御料理御盃、且代金金五枚御刀一腰宛被下之。

御出興御見立、御一門様初五十余人、御大書院に而御饗応、御盃之内御拍子三番。飛騨守様・長門守様御披来之上、於御小書院御饗応、御盃之内重而拍子三番有之。

11 元禄七年四月付御講釈拝聞・御能拝見御札檜重のこと【元禄七年雜記(6-4)】

四月廿六日

一、今日依 御講釈御拝聞御能御拝見、御檜重御献上被遊候ニ付、御檜重之仕立、至今朝入 御覽候処、ケ様急ニ罷成入 御覽申儀ハ如何之儀候哉、たとへ悪敷旨被 仰出候とて、為仕直申儀罷成不申筈ニ候。前廉ニ被 仰出置義ニ候条、出来次第早速入 御覽候へハ、悪敷所被仰出候而も為直申儀罷成義ニ候。もはや時ニのそミ

御好被遊候ても為直申義罷成不申時入 御覽、不調法之由被 仰出。伴源兵衛・塩川安左衛門^江申渡之。

二十六日条は、9に見えていた講釈と御能に關係して、献上のため用意した檜重を当日の朝綱紀に見せたところ、これでは不都合があったときに直すことができないから、もう少し早めに見せよという通達である。辻弥三郎、伴源兵衛長安は公事物奉行であった。檜重とは、檜製の重箱で、將軍や大奥など、貴頭への献上の料理を詰めたもの。他に杉重などもあり、箱の材質により、格式が相違した。

なお、四月二十六日条の江戸城講釈、御能については以下の通り。

廿六日

右登 城、於御座間、御講釈^讀。畢而水戸殿大學講釈被仰付、畢而、
一、御家門方加賀守御能拝見被仰付、於竹之間御料理被下之。其外者於菊間被下。
一、紀伊大納言殿・尾張中納言殿・甲府中納言殿・水戸宰相殿・水戸中納言殿・紀伊宰相殿・松平加賀守、御文台御硯箱被下之。
松平右左京太夫
松平摂津守

氷室 松平飛騨守
忠度 本多下総守
上 江口 安宅 乱
(『柳宮日記』)

猶以今般御菓子御料理、三方薄盤被仰付、御茶も台に而被下之、重々結構成仕合候。随而廿九日岩松殿結納之儀首尾好相済、当月六日御老中招請、万端無残所被是令大慶候。此等打続候故、右仕合之趣早速不申聞候、以上。

去廿六日御講釈御能被遊候条可致出仕之旨、其以前被成御奉書候付而登城之處、於御座間御三家・甲府殿御対顔、自分も御目見仕、追付論語雍也篇之内御講釈拜聞被仰付。御講以後各御表迄退出、無程又御座間召之、御能拝見、且又御三家

勤左衛門 八四郎 牛之助 飛越 伝五郎 石橋 政丞 彦九郎 三助 三郎左衛門 又六
し罪人 弥太郎 御乞能 藤戸 宝生 彦九郎 三郎右衛門 平八 鉄輪 善内 勤左衛門 七左
衛門 牛之助 祝言 陸丞 清兵衛 彦九郎 文平
一、宝生大夫・同政丞・金春七郎へ檜御重一組充被下之。今日政丞石橋相勤申候付、
小鼓宝生新九郎相勤申等候へ共、病後難相勤旨御断申上、幸五郎左衛門相勤之。
石橋前後首尾好相済、正面之台之上脇座之方ニ而仏たおし、其外細成仕舞、諸人驚
目。石橋相勤父子へ為御使、伴源兵衛御楽屋へ被下之。宝生大夫、大御料理之間
迄御礼ニ罷出、葛巻新藏迄謁之。

15 同月二十一日付御城御講釈拜聞御仕舞拜見被仰付御札ならびに小堀土佐宛書状控
〔元禄七年雜記(7-1)〕

閏五月廿一日

一、八半時、戸田山城守殿より御奉書 御老中御四人 参候。其趣ハ、御講尺御仕舞被遊候間、
明日四時可有御登 城旨申来。御請被遣、暫有之、七半時前藤戸之御能相済、御
老中方・備後守殿・出羽守殿へ被成御座、暮過 御帰館。

一、今日之御能被承及、方々より見物仕度旨御願之御衆有之、御出之御由緒有之御
面々ハ御出被成候様被 仰遣、御由緒無之御方へ者御断可申入旨被 仰出。小堀
土佐守殿より与三兵衛迄申来返書。御好ニ而如左申遣。

御手紙致拜見候。然者柘植伝兵衛様より之御切紙被指越、則宰相殿ニ相達候処、
伝兵衛様之義ハ此方へ御出入之儀ニ候間、無御遠慮御同道被成候様ニ被存候。

野田三郎左衛門様義ハ終ニ不被申通候。何とそ子細無御座候而ハ何方へも御断
被申候間、左様ニ御心得、宜被仰達候。以上。

閏五月十八日 小土佐守様 野村与三兵衛

14、15は一連。網紀参議任官祝賀能の関連資料。旗本高家肝煎大沢基恒(右京大夫)、
盛岡藩主南部行信(信濃守)ほかを招待しての能興行。金春七郎の(鶴祭)ほか能九番、
狂言五番。前日閏五月二十日条にある通り、宝生政丞が能(石橋)を初演した。小鼓
を勤めるはずだった宝生新九郎が病氣のため、同じく宝生座付小鼓の幸五郎左衛門が
代演した。能自体は好演した由で、仏だおし(五月二十九日条参看)などのさまざま
の華麗な所作で観客の目を楽しませたようである。宝生友春自身がそうした華やかな
演技で將軍の愛顧を得ていたらしく、当時の宝生流の芸風をしのばせる。病欠の小鼓
方宝生新九郎は、本姓は觀世新九郎(七代豊房)で、觀世方小鼓の名門であったが、
宝生びいきの將軍綱吉の命により、貞享年間に父六代豊重と共に宝生座付となり、名
字も宝生となった。元禄九年に觀世座への復帰が許され觀世姓に戻るが、元禄七年時

の加賀藩の記録では觀世・宝生両姓が混在する。
なお、当該資料第一条所載番組では「御乞能 藤戸」のあとに「鉄輪」「祝言」を記
すが、加越能文庫「御能方」では「鉄輪」のあとに「藤戸」を記す。

この日、老中戸田忠昌(山城守)より翌日將軍徳川綱吉による論語講釈および仕舞
の拝聞・拝見許可状があり、とりあえず請状を差し上げておき、家内の祝儀の終了後
に老中四人(戸田のほかは阿部正武、土屋政直、大久保忠朝)および側用人牧野成貞(備
後守)、柳沢保明(出羽守。のちの吉保)のところへ挨拶に赴いたことが記される。な
お「徳川実紀」によると閏五月二十二日に招請されたのは網紀のほか紀伊藩主徳川光
貞、甲府藩主徳川綱豊。

第四条は、二十一日の能を見たいという諸方からの願出に対して、網紀や加賀藩と
ゆかりのある者は受け入れ、関わりのない者に対しては断るようにとの達しである。
小堀土佐守(小堀正貞。茶道遠州流の祖としても知られる小堀政一の子息)からの要
請に対しては、特別に網紀よりの指示があったらしく、その断り状を引用する。小堀
が柘植伝兵衛(宗正)、野田三郎左衛門(秀成。以上二人ともに幕府代官職)の同道を
依頼してきたのを網紀に伝えたところ、二人のうち、柘植は前田家に出入りしており、
つきあいがあるので連れてきてよいが、野田の方はつきあいがいいので断ってほし
いとの旨が記載されている。

16 同月二十七日付保科肥後・吉良上野他招請任官祝儀能番組〔元禄七年雜記(7-1)〕

閏五月廿七日

一、為御任官御祝義、今日肥後守様・吉良上野介殿・小出播磨守殿、其外御出入之
御面々御招請御能御興行。

養老 求馬	權右衛門	佐藏	左吉	庖丁むこ	八右衛門	經政	吉之助	甚左衛門
門	六之進	牛之助	秀句傘	弥市郎	采女	金春	彦九郎	三郎右衛門
哥盗人	八右衛門	羅生門	五郎太夫	權右衛門	彦九郎	金助	三輪	宝生
郎	新九郎	左吉	御中人	富士太鼓	金春	權右衛門	三郎	源二郎
五郎	長良	五郎太夫	彦九郎	久四郎	權六	三人かたわ	八右衛門	海士
衛門	勤左衛門	文平	祝言	陸丞	吉大夫	惣十郎	平八	金助
七左衛門	文平	二部三郎	金助	八				

金春大夫・宝生大夫・大蔵求馬へ御檜重被下之。

会津藩主保科正容(肥後守)、吉良上野介義央(旗本高家)、出石藩主小出英長(播
磨守)ほかの日頃交際のある諸侯を迎えての宰相任官祝賀能。能九番、狂言五番。金
春大夫・宝生大夫・大蔵求馬らシテ役者に褒美として檜重が下されるのは通例通り。

六月四日

御任官御祝義旁今日本庄因幡守殿・御息安芸守殿・（因幡守殿御次男富田主膳殿御養子）富田頼母殿（皇流富田主膳殿御養子）・六角越前守殿・大沢越中守殿、其外御出之方々有之。牧野大藏殿、御出之筈ニ候へ共御病氣ニ付其儀無之。御盃事之内、宝生大夫・同政丞・同吉之助、謡被仰付。後段以後右之者共仕舞。一曾又六・宝生新九郎・今春三郎右衛門・同三助・観世左吉、尙挺物被 仰付。

引き続き参議任官祝賀が続く。この六月四日条に名前が見えるのは綱吉生母桂昌院の養父で笠間藩主本庄宗俊（因幡守）、その子息資俊（安芸守）及び次男で富田主膳（知郷）・養子の富田頼母（智儀）、宗俊女婿の六角越前守広治・大沢越中守基躬（ともに旗本）など本庄家ゆかりの面々が中心。来るはずであつたが病氣のため来なかつた牧野大藏も本庄宗俊の子息で牧野家の養子。この日能は催されなかつたが祝宴の最中宝生大夫と子息政丞・吉之助（宝生嘉内家祖）による謡と、一曲の後場の舞囃子（当時の「仕舞」は現在の舞囃子に相当）のほか、一噌又六（宝生座付笛方）・宝生新九郎（宝生座付小鼓方。『御能方』では観世姓）・金春三郎右衛門・三助（伝藏の兄）親子（ともに金春座大鼓方）・観世左吉（観世座太鼓方）を加えての一調（老挺物）が催された。

18 七月十九日付仙溪院・前田飛騨守招請任官祝儀能番組【元禄七年雜記（7—1）】

七月十九日

一、御任官為御祝義、仙溪院様・飛驒守様御招請ニ付、仙溪院様者昨晚より被為入候
飛驒守様者今日四時より御登城之筈ニ付、朝五時前御料理被進候。今日金春大夫
関寺相勤候、何とぞ飛驒守様御見物被成度候間、関寺三番目ニ候へ共、修羅被指除、
関寺二番目ニ被仰付候様ニ被成度旨ニ而、則金春三郎右衛門へ其段被仰渡。脇々
二而も二番目ニ相勤候例有之、其通被仰付候。
一、今日御能、御目見仕町人共見物被仰付候。
一、御家来頭分、其外平持・御徒並迄見物被仰付候。

東方朔 八左衛門 新丞 助左衛門 太左衛門 文 平
三郎右衛門 一曾 宗古 はき大名 仁右衛門 道成寺 政丞 新丞 三助 左吉
長右衛門 車僧 吉之助 清三郎 次郎三郎 平八 金助 羽衣 宝生太夫 清三郎 源七
んそう 弥市郎 子盗人 長太夫 東岸居士 喜大夫 甚左衛門 七左衛門 文平 し
平三郎 太左衛門 源次郎 小督 八左衛門 新丞 久四郎 六之進 源次郎 融 宝生太夫
七 三 一郎 助 左吉 すはしかみ 伝五郎 御乞能通小町 宝生大夫 清三郎 平三郎 新九郎 文
五郎左衛門 又六 祝言 陰丞 吉大夫 彦三郎 梅六 半十郎 平八

一、宝生大夫・政丞、一兩日以前參上之時分、今般政丞初而道成寺相勤候処、於此方被仰付候二付、唐織^{（衣類）}被^{（被下）}之、父子御前へ被召出、御稽古御尋之儀共相濟、葛巻新藏持參、相渡之、御懇之御意共有之。父子拝伏難有奉存由、新藏へ述之。

先々代藩主前田利常の娘で綱紀の叔母にあたる仙溪院（熊姫。会津藩主保科正経（正容）の兄。天和元年没）の室）および大聖寺藩主前田利直（飛騨守）を招いての祝賀能。能十番、狂言六番。なお『御能方』によると最後の祝言は（呉服）。

仙溪院は前夜に加賀屋敷に到着、前田利直は同日四時（午前十時）から御登城の予定であるので、五時前にお料理を召し上がった。この日金春大夫（八郎元信）が勤める（関寺）をどうしてもご覧になりたいとのことと、（関寺）は本来三番目であるが、二番目の修羅物をやめて（関寺）を二番目にしていただければとのことなので、そうするようにと大鼓を勤める金春三郎右衛門（同家二代信勝）に申し渡された。今までも他所（脇々）でも二番目に勤める例もあったので、その通りするようにとお達しが出たもの。現在最高秘曲として名高い（関寺）であるが、この時代にもその片鱗が窺える。この日及び連日の番組にはたいてい若い江戸の役者や御細工者の名が混じるが、（関寺）に限ってはシテ金春八郎元信ほか、ワキ春藤源七（江戸金春座付ワキ）、笛一曾宗古（一噌八郎右衛門宗光。一噌流三世。江戸の役者だが京都にも屋敷あり）、小鼓大蔵長右衛門（江戸金春座付小鼓）、大鼓金春三郎右衛門と金春座を中心に老練な玄人役者たちで固めている。大鼓役にこの特例措置を命じたのは、同人が前田家ともともと縁が深かったということと、元禄に入って過去三度まで金春大夫元信の（関寺小町）に共演したという実績によるのであろう。なおこの日の能は出入りの町人や江戸詰の家中の武士にも見物を許している。

また宝生政丞が（道成寺）を初めて勤めるため、その装束として唐織が一、二日前の綱紀の稽古の際に下された。政丞は閏五月二十一日条（石橋）に続いての初役。

19 七月二十二日付諸門跡招請任官祝儀能番組【元祿七年雜記（7—1）】

七月廿二日

、御任官爲御祝儀、今日伝通院・広徳寺・増上寺御宿坊寿光院、御勝手江常照院并前田右京殿・同帶刀殿、其外御心易御面々五六人御出。伝通院・広徳寺伴頭役者等被召寄、桂昌院様より今日御拝領之御菓子・御茶、御披被遊。

西王母	吉之助	清二郎	三衛門	太左衛門	音曲	彌市郎	八嶋	左大夫	甚左衛門	助三郎	平
穴穗猿	仁右衛門	東北	宝生大夫	彦九郎	三郎右衛門	又六	大般若	若仁			
現在鵜	陸丞	彦九郎	次郎二郎	梅六	天鼓	政丞	清兵衛	三助	又六	御中	
右衛門			半七郎	平八							

入 桜川 左大夫 吉大夫 文平 悪太郎 伝五郎 鵜飼 宝生大夫 甚左衛門
門 次郎三郎 金助 安宅 政丞 彦九郎 七左衛門 文平 つうゑん 仁右衛門 御名能 鵜飼
小町 宝生大夫 彦九郎 三助 又六 祝言 喜大夫 清三郎 佐藏 権六郎 平八

引き続き任官祝賀能。この日は家康生母の菩提寺伝通院、前田家墓所の広徳寺、將軍家菩提寺の増上寺寿光院ら諸門跡を招いたほか、勝手からは七日市藩主前田右京利慶や同じく七日市前田家の前田帯刀孝治ら親戚筋の面々が参上した。伝通院・広徳寺の寺務の坊官らを召し寄せ、同日桂昌院より拝領の菓子・茶が振る舞われた。能十番、狂言五番。

20 七月二十六日付御拝領御筆披露招請能番組【元禄七年雜記（7-1）】

七月廿六日

一、飛彈守様之御内様、今朝初而御安産。御女子様御出生。
一、今度御拝領之 御筆物、今日肥後守様・安芸守様・岩松様、其外御招請、御拝見。御能御興行。

寝覚 政丞 源七 久四郎 太左衛門 鍋八はち 弥太郎 知章 喜大夫 甚左衛門 佐藏 平
八 蚊すまふ 弥太郎 藤三郎 清三郎 市郎兵衛 庄兵衛 柿山伏 伝五郎 小
袖曾我 吉助 勘左衛門 文平 蟬丸 宝生大夫 源七 三助 文平 しんはい 弥太郎
御乙 放下僧 宝生大夫 源七 市郎兵衛 庄兵衛 熊坂 政丞 吉大夫 彦三郎 権六郎 平八
ふおとし 弥太郎 祝言養老 豊盛 清兵衛 半十郎 文平 金助。

綱紀は將軍綱吉から綱吉直筆「徳不孤」を拝領した。『加賀藩史料』所引『政隣記』によると徳川光貞・綱豊とともに拝領したとある。それに表具を施し、保科肥後守正容や浅野綱長父子に披露する祝宴の能が行われた。能八番、狂言五番。これについては本紀要Ⅶ「前田綱紀と加賀藩の能」14に関連文書がある。

なおこの日産まれた大聖寺藩前田飛驒守利直の息女はのちに富山藩主前田利興の室となる富貴姫である。

21 七月二十七日付牧野大蔵招請能番組【元禄七年雜記（7-1）】

七月廿七日

一、為御任官御祝義、先頃本庄因幡守殿御招請之刻、牧野大蔵殿之儀、御病氣御出無之三付、今日御招請。因幡守殿にも御押懸御出。御料理之内、宰相様御出、御挨拶之後、俄大蔵殿御能被成管之条、役者呼三可遣旨被 仰出。宝生大夫者今日謡二而も可被 仰付哉と、御勝手へ被 召寄置。

御能相済、於小書院、後段出之内仕舞。

鶴亀 牧野大蔵殿 甚左衛門 勘左衛門 太左衛門 文平 鉄輪 宝生大夫 清三郎 次郎三郎 金助 橋弁慶 大
藏殿 六之進 文平 舟ふな 伝五郎 是界 大蔵殿 清兵衛 勘左衛門 太左衛門 平八 狸々 吉之
助 喜大夫 彦三郎 権六郎 小塩 幸相 後段仕舞 春日龍神 大蔵殿 自然居士 宝生大夫 笠之段 大蔵殿 羽衣 奥書長左
東北 宝生大夫 芦刈 喜大夫 花月 吉之助 西行 松喜大夫 笠之段 大蔵殿 羽衣 奥書長左
前門殿 小塩 幸相 後段仕舞 春日龍神 大蔵殿 自然居士 宝生大夫

六月四日条で病氣のため祝宴を欠席した牧野大蔵を招いての宴。大蔵の実父で桂昌院の養父でもある本庄因幡守宗俊も正式に招待されていたが来会した。料理になつてから綱紀が挨拶に出たとあるから、こういう場合ははじめ家老などが応接したものか。綱紀の挨拶の後に、急に大蔵が能を自演するはずであったと綱紀が言い出し、役者を呼びに行くようにと命じた。宝生大夫を本日謡なりとも命じることになるかと、御勝手に呼び寄せておいたのである。能五番、狂言一番が行われた。急な出来事であるためか囃子方には御細工者の名前が目立つ。能（狸々）のワキ「喜大夫」は金沢のお抱え役者で宝生大夫の弟子となつていた諸橋喜大夫か。御細工者高橋吉大夫（地謡方だがワキを勤めた記録数例あり）の誤りかとも考えたが、この日は急な要請であつたため、ワキ役者があまり揃わず、諸橋が勤めた可能性が高い。能の後、小書院にて後シテの登場の段からの舞囃子が九番行われた。大蔵は能（鶴亀）（橋弁慶）（是界）と舞囃子二番を舞い、綱紀も舞囃子（小塩）を舞った。舞囃子（羽衣）を舞った奥津兵左衛門忠聞は本庄宗俊の女婿であり、牧野大蔵の親戚筋にあたる。

22 八月二日付林大学父子等招請任官・拝領御筆披露祝儀一件【元禄七年雜記（7-1）】

八月二日

一、御任官御祝義并御拝領之御筆物御披露、今日林大学頭殿・御息七三郎殿、其外御出入之御面々御招請。大学頭殿、論語学而篇一章御講釈、相済、御料理出。御盃事之内、喜大夫・陸丞、小謡被 仰付。畢而御庭へ御出。

参議任官祝賀及び綱吉筆「徳不孤」の書の披露のため、林大学頭信篤・信充父子他、つきあいのある「御出入之御面々」を招待したもの。拝領した御筆物が『論語』の一節ということであつたために、大学頭が『論語』学而篇を講釈した。その後に祝膳が供され、酒になつてから、諸橋喜大夫・波吉陸丞（のちに諸橋家養子となる）に小謡を謡わせた。食後には庭を遊覧した。

23 八月九日付女中衆・家中拝見任官祝儀・御筆拝領披露能番組〔元禄七年雜記（7-1）〕

八月九日

一、御任官祝儀并御拝領御筆物御披旁、今日御節姫様御表江御出。宰相様御自身御能被遊。御城女中衆も御出。年寄中并頭分之面々へも御能拝見被 仰付、御料理被下候。当番有合候者共、末々迄御能拝見被 仰付。

一、飛騨守様今日御出被遊候様被 仰進候処、七半時 御城より御退出、直ニ御出。

白鬚 喜大夫 彦九郎 勘左衛門 太左衛門 忠二郎 麻生 長大夫 簀 隆丞 清兵衛 彦三郎 平

八 穴穂猿 同人 二人静 室生大夫 連政丞 新丞 三郎右衛門 又六 鬼

のま、子 弥市郎 鐘引 政丞 清三郎 二部三郎 金助 御中入 御龍

田 新丞 市郎兵衛 左吉 釣猿 長大夫 松虫 室生大夫 彦九郎 六之進 忠二

郎 是界内記 連八丞 内匠 伝藏 平八 花おり 平右衛門 鷺吉之助 新

丞 市郎兵衛 左吉 祐善 長大夫 御小督 彦九郎 七左衛門 又六 福神 伝五

郎 橋弁慶 後より政丞 勘左衛門 忠二郎 乱 室生大夫 甚左衛門 三郎 又六

一、二人静、室生大夫・政丞父子にて相勤。去年八月從宰相様拝領之對之装束ニ而相勤。着付、摺箔地白ぬめりんす、金銀桜の花。腰巻、縫箔赤地ぬめりんす、したれ柳。長絹、紫地紋所鞠はさみ、すそ鞠かゝり。此装束、最前模様等室生大夫へ御好ませ。但可被下旨にてハ無之、外之御装束共と一所ニ模様申上、出来候上被下之。

加賀藩家中に對する綱紀參議任官祝賀及び綱吉から拝領した御筆物披露の宴。綱紀息女節姫も出席し綱紀自身が能を舞った。城の女中というのは、奥詰めの女房達をこのように呼ぶのであろう。江戸城の女中衆というわけではあるまい。節姫の出御に合せて女中衆にも拝見が許されたものであろう。共々拝見を許された家老や頭分の上級武士には料理が振る舞われ、当番で江戸屋敷に詰めている家臣たち全員にも、拝見するようにとの命が下った。能十番、狂言七番（大蔵）長大夫所演の「釣猿」は「釣狐」の誤り。うち綱紀が舞ったのは、〈龍田〉（小督）の二番。また「内記」こと大聖寺藩主前田利直が〈是界〉を舞い、このときワキを勤めた「内匠」は加賀藩士前田孝之と思われ、御細工者以外の家臣が演能に関わった珍しい例である。

番組に能（鐘引）の名が見えるのも注目に値しよう。〈鐘引〉は上演記録が少なく、現行五流すべてで番外曲である。しかし、元禄・宝永期には綱吉・家宣の好みから、盛んに番外曲が復曲上演されたことが知られている。〈鐘引〉もその一例で、加賀藩では稀曲上演の記録は比較的少ないが、やはり將軍の好尚に追従する傾向があったことがわかる。

室生大夫・政丞親子が舞った（二人静）の装束（着付の小袖・腰巻の小袖・長絹）は、昨年綱紀から拝領したものといい、文様について詳しい記述がある。他の装束と共に

室生大夫に意匠を決めさせ、仕立て上がった後に改めて下賜したもの。

24 木下平三郎宛室新介書状案〔元禄七年雜記（7-2）〕

十月十二日

一、木下平三郎殿江室新介方より之書状之案、御好ニ而申渡、下書入 御披見候処、宜旨被 仰出。

一筆致啓上候。先以先生御病氣弥御平復被成候哉、承度奉存候。今度者御病勢御大切ニ相聞、御老躰殊向寒氣候故、宰相様別而無御心許被 思召候処、早速被得御快駿之段被仰越、御大慶不浅被 思召御様子御座候。然者兼而如得御意候、向後之儀者世之交接往来等随分御省略候而、朝夕御元氣御取立被成候儀、專一御座候。只今迄之通、御事繁候而者、可被養御元氣様無之儀与奉存候。幸此度御病後為御養生、被止御世話之条、人々子細ニ可存様無之儀ニ御座候。其内御老中・若年寄衆・御側衆之御事者各別、畢竟公義正も懸申儀ニ御座候間、随分御勤可被成儀御尤御座候。左候得者御奉公之筋も相立、可然儀ニ御座候。世事繁多ニ而被旁精神候段、誠無詮儀ニ御座候。從宰相様以 御書右之思召被 仰入度被 思召候得共、此砌御氣色御勝不被成、第一爰許御用繁候故、此度御音物被遣候得共、先生も御病中御六ヶ敷可被思召与、旁 御書不被指添候間、件之趣も私方より委細申達候様ニ与御懇之被 仰出ニ御座候。私儀も兼々右之通ニ存寄罷有儀候処、右被加 御意候段私式迄忝御儀奉存候。先生御病中故、御自分様迄如此ニ御座候間、呉々可被加御賢慮候。尚期後音之時候。恐惶謹言。

十月十二日 木下平三郎様 室新介

本文書は能には関連しないが、室鳩巢が綱紀に勤仕していた時代の資料で、綱紀を取り巻く文化人の動静を紹介する意味で掲げた。内容は、木下順庵の子息木下平三郎宛の書状案を室新介（鳩巢）に綱紀の命で書かせたが、その下書きを綱紀のお目に掛けた所、これでよろしいとの仰せをいただいた。本書状の趣意は、主君綱紀に代わり先生（木下順庵）の病状を見舞うものである。

木下順庵は、元禄十一年十二月二十三日、江戸にて没したが、本資料の記された元禄七年当時病床にあったことが知れる。これが直接死因と関係するものかは不明である。順庵には二子があったが、長男順信（浄庵）は、順庵の没前に没したため、次男平三郎（寅助・菊潭）が順庵の跡を継いだ。平三郎は、天和二年に順庵が幕府の儒官となつた後、加賀藩の儒官として仕えていた。順庵の死後は、幕府に仕え、『菊潭集』などの著作を残した。室新介は室後の鳩巢で順庵の高弟。当時は加賀藩に仕えていた。

十月晦日

一、宝生大夫より書状差越、入 御覽、返酬遣之。

一筆啓上仕候。弥其御地、宰相様益御機嫌能可被為遊御座、恐悅之至奉存候。貴殿様も弥御堅固御勤仕可被為成、是又珍重奉存候。於御当地御屋敷、無御別条候間、可貴意安候。次私義無異儀、方々相勤罷在候。御用之儀も御座候者不相替被為 仰付被下候様御取成奉頼候。且又当年神田神事能、町中より被頼相勤申候。能組者十左衛門差上可被申候。委細之儀者十左衛門可申上候間、不具候。乍恐為窺御機嫌、旁如斯御座候。御次而之刻、御前可然様奉頼上候。猶期後音之時候。恐惶謹言。

十月十日

葛巻新蔵様
人々御中

宝生大夫

猶々此度十左衛門罷登候。乍憚万端御引廻し被遊可被下候。偏奉頼候。

芳染令拝見候。雖向寒氣候、御自分御堅固方々御勤、今般神田神事能首尾能御勤之段、珍重之至候。如仰能組者松井十左衛門致持參候。宰相様弥御快然之御事候。入御念候御紙上之趣、相達御聴候。次拙者無異勤仕候哉与蒙仰、忝存候。尚期嗣音之時候。恐惶謹言。

十月晦日

宝生大夫様
御報

葛巻新蔵

尚以十左衛門儀被示聞趣令承知候。道中無異儀參着候。可御心安候。以上。

在国中の網紀へのご機嫌伺いとその返信。宝生大夫より葛巻新蔵宛書状と、それに対する新蔵の返信である。前者は、神田神事能の首尾について、松井十左衛門（宝生流ツレ役者）に番組を持参させ、委細報告させるので同人の引き回し方をよろしく取り計らっていただきたいとの内容である。それに対し、新蔵は十左衛門が無事到来し、網紀もその報告を受け取って御機嫌であった旨を記している。宝生大夫は、九世友春であり、この年の神田明神神事能大夫を勤めた。

神田明神の祭礼である神田祭は、趣向を凝らした三十六基の山車が随行するという豪華な行列で知られる。天和元年以降、山王祭と隔年で行うことと定められ、祭日は、九月十四・十五日であった。（明治二十四年より現行の五月十五日と改められた。）

神田神事能については、『北条五代記』に以下のような記述があり、すでに大永年間に実施されていたことが知られる。

我が氏子どもいかなる祭祈禱をなすとも能の舞樂にはしかじと有しより、毎年九月十六日に神事能あり。然る所に、上杉修理太夫藤原朝興は武蔵の国主として、江戸の城にまします、大永四甲申の年北条左京大夫氏綱江城をせめ落し、上杉を

亡し、武州を治め給ふ。是に於て、申の年神事能なくして、次の年に神事能あり、是吉例なりと、氏綱仰有てより以来年中一年へたて三年目ごとに神事能あり。（以下略）

〔北条五代記〕「神田神事能の事」

また、神事能を始めたものは秀吉のお気に入りであった暮松新九郎であつたらしい。暮松は、山崎離宮八幡神職出身の素人役者であつたらしく、秀吉の信頼を得て、側近として能役者を統括する立場にあつたようである。その後晩年の秀吉の機嫌を損ね、関東へ下り神田明神の神事能を勤めたとされる。暮松の後には、宝生大夫がこれを継承したらしい。

我等承り候は京都に於て、関白秀吉公の時代に、暮松大夫と申たる者有之。殊外秀吉公の氣に入りにて、四座の者共の觸かしらの様に有之候処に子細有之、上方の徘徊を相止て、当地へ罷下ると也。其節には名有る猿樂共の江戸下りを仕る義いさ、か成る折節、暮松大夫不慮に罷下り候に付、武家町方によらず乱舞に数寄たる輩は、何れも暮松大夫を馳走仕候。中にも大伝馬町に罷在候五霊香と申町人乱舞を好を以て、別て暮松を取持、町年寄佐久間杯の子供をも暮松が弟子に引き付て、我居宅の内に舞台をしつらひ、稽古能の興行を初、其後相談をいたし、暮松か助成の為、神田の社の中に於て神事能を初め候節、町年寄共のはたらきを以、江戸中より出金を出させ、夫を取りあつめ、暮松方へ遣候を以心安く渡世仕となり。其後暮松相果、子供幼少故能興行も相止る処に、関ヶ原一戦以後の義は、四座の者共も御当地へ罷下り候に付、神田神事能の義を再興いたし、観世大夫方へ相頼み可申と有之候処に、北条家繁昌之節、北条氏直能の師匠として、保生四郎左衛門と申者を招き被申候に付、保生大夫上方をば病氣故隠居いたす旨申立小田原へ下り、氏直の舞を指南仕候より事起り、小田原中悉く保生流と罷成候処、天正十八年に至り北条家断絶故、氏直扶持人の役者を初め乱舞を数寄候物迄悉御当地へ罷出、渡世仕り居中内に、右之通り暮松大夫罷下り神事能初るに付、小田原崩の役人共右の能に出相勤るを以、保生大夫儀を最厚致し、暮松大夫が跡代りに取持となり、実不実の段は不存候得共、我等若年の節、去老人の物語にて承りたる趣に候也、右暮松が子孫は、餘程太々神樂打の頭となりて居申候と也。

〔落穂集〕（『改定史籍収覧』所収）「神田明神の事」

また、『舞正語磨』の著者として知られる秋扇翁が、承応二年九月十八日に行われた神田明神神事能を、『承応神事能評判』として残していることも知られる。この時為手を勤めたのは、喜多十太夫当能であつたとされ、宝生大夫以外が勤めたこともあつたようである。

26 釈菜の串海鼠包装故実〔元禄七年同八年雜記（8—5）〕

八月十九日

一、明後廿一日、於 聖堂釈菜 御成ニ付、今日林大学頭殿^五以御使者大奉書・串海

鼠被遣之。認入御覽候処、兩様共箱入ニ相認申候処、御肴も此宮候哉与 御尋ニ付、御用人ニ相尋候処、只今者御肴も箱ニも認申候、箱・籠之事ハ取舍之物などの様子次第ニ仕候、右串海鼠之儀、箱可然与致僉議、箱ニ申付候旨申上候処、先日前田右京殿^五水餅・串海鼠被遣候、兩様共參物ニ候処、水餅ハ箱、串海鼠ハ籠認候故、取舍不都合ニ候、一向生肴ハ各別之旨被 仰出、串海鼠箱ニ相認申候。今日之串海鼠も右之御進物ニ該申牀ニより、御道具などニ差添申候于者等者、籠入宜旨被 仰出、籠ニ認直被遣之候。

本文書も能には無関係ながら、儀礼関係の記事として興味深いので採録した。湯島聖堂に將軍綱吉が台臨し、積菜（セキザイ）の儀式が行われるというので、串海鼠（クシコ、大海鼠を鍋で煎り上げた煎海鼠（イリコ）を串にさして干したもの）を、大判の奉書紙に記した書状とともに林大学頭に送る際に、準備の品を綱紀の検閲に備えたが、両方を箱に納めていた。差し上げる御肴（串海鼠）もこの箱を用いるのかとの下問があり、用人に問い合わせたところ、収納を箱にするか籠にするかは一緒に送るものの内容次第なので、串海鼠は箱がよいだろうと一決し、箱を準備させたと申し上げた。すると、過日前田右京（上野国七日市藩主前田利慶（トシヨシ）。同藩は前田利家の五男利孝が、大坂の陣での功により七日市を与えられたのに始まる）に水餅（寒中にさらして凍らせた餅のことらしい）と串海鼠を送ったことがあった。両方とも食品であったのに、水餅は箱、串海鼠は籠に入れたので、その取り合わせは不都合である、すべてが生鮮食品の場合は特別であると仰せがあつて、その時は串海鼠も箱に入れたのであつた。今回の串海鼠も右と同じ進物にあたるのであるが、道具類等に添える干し肴類は、取り合わせ上は籠に入れるがよいとの仰せで、籠に入れ直し、林大学に送ったのであつた。

文意に釈然としない点があるが、一応右のように訳した。積菜とは、「古代中国で、先聖や先師とくに孔子とその門人をまつるのに、牛や羊などの正式のいけにえではなく、野菜などで代用して祭典を行うこと。わが国にもこの風習が伝わり、江戸時代、湯島の聖堂で二月と八月に孔子をまつる祭典を行った。二月のを積菜、八月のを積奠（セキテン）」という（日本国語大辞典）」とされる。湯島聖堂の積菜については、湯島への聖堂移築翌年の様相を記す『徳川実記』元禄四年二月十一日条に詳しい。儀式の後半に、酒とお供え物が振舞われるとあり、串海鼠もこの際に用いられたのであろう。

林大学頭は、林信篤である。林家は、初代羅山以後、幕府教学の中心となつた。信篤は、林鷺峰の次男として生まれ、鳳岡とも称した。元禄三年に湯島昌平坂に聖堂が造営されると、聖堂預、祭酒に任じられ、大学頭を称した。

27 拝聞の訓故実（元禄七年同八年雜記（8—6））

八月廿九日

一、昨廿八日於 御城、内々御願之御講釈、來ル晦日可被遊旨、被 仰出、為御礼御老中方^五御趣被成候。若年寄衆・御側衆^五御使者參不申候哉之旨、御歸館已後 御尋ニ付、前々之儀御用人相考候処、御拝聞之時、日限被 仰出候時分、若年寄衆・御側衆へ者御使者不被遣候（之留^五有之、乍然先年一度若年寄衆へ御使者被遣候留有之、相達 御聴候。其節 御拝聞と申上候処、御拝聞はいもんに候哉、はいぶん候哉之旨 御尋、前々より何もはいもんと覺罷在候、昨日 御留守之内、木下平丞殿被參候、御拝聞之儀被申候、野村与三兵衛者御はいもんと承申候、藤田平兵衛はいぶんと承候、今日も平之丞殿御見廻可申旨被申候間、被參候者相尋可申上旨申上候処、於 御城土屋相模守殿はいぶんと被仰候、又戸田山城守殿もはいぶんと被仰候旨被 仰出。今日平丞殿被參候故、平兵衛相尋候へハ、はいぶんとはいもんと被仰候旨被 仰出。今日平丞殿被參候故、其内平三郎殿も被參候故、与三兵衛・平兵衛又老岐も相尋候処、平三郎殿も兩様ニ申候旨被申候付而、兩様之内、皆々多被申候ハ何之方ニ候哉与相尋候処、はいぶんと申方多様ニ存候由被申候趣、相達 御聴候処、林大学頭殿も 御尋被成候処、はいぶんと被仰候て宜由御申之由被 仰出。

將軍の漢籍講釈に祇候することを拝聞というが、「拝聞」の読みは、「はいぶん・はいもん」のいずれが正しいのかとの仰せについてのやりとり。木下平丞は、順庵。野村与三兵衛重徳、藤田平兵衛安勝はいずれも加賀藩臣下。土屋相模守、戸田山城守はともに老中である。平三郎とあるのは、木下平三郎寅亮（ノブスケ）で、順庵の次子である。読みについては、兩様あるものの、「はいぶん」とするのが一般的との見解で決着している。

28 元禄八年八月晦日付足輕歸國言上等無用の通達（元禄七年同八年雜記（8—6））

乙亥八月晦日

一、割場支配より足輕小者為代金沢^五相返候旨、以紙面申上候処、此義言上年來年無用可仕旨、被 仰出。塩川伝兵衛・辻長右衛門、申渡之候。
一、從御國元御肴等參候得者、御台所方支配之者方より書付差上候。其外会所方よりも到來之儀言上之品有之候。是以向後言上之儀無用可仕候。但表向之儀者御用人共承届置可申候。或御膳奉行手前^五參候物などハ、御近習頭共承届置可申候。若以 御意到來之品ハ御近習頭共より可申上旨被 仰出。御用人御近習頭中^五申聞之候。

前条は、各所に配属された足輕を金沢へ帰すことを、これまでは紙面にて届け出ていたが、今年と来年は無用であるとの通達である。後条は、国元から魚などが到来した際に言上は無用であるが、表向きは、御用人が届けるべきであり、また御膳奉行に直接参つたものや、御意によつて到来した品は御近習頭から申し上げるべきとの通達である。

辻長右衛門は、『御用番方留帳』によれば「割場奉行」とあり、塩川伝兵衛も同様であろう。会所は、藩侯及び内廷用の物品出納、幕府への進献等を取扱う役所、御膳奉行は藩侯の献立を作る役所である。

29 表能舞台幕揚働きの事〔元禄八年同九年雜記（10—4）〕

四月三日

一、昨日表御舞台三而御稽古御能被遊三付、御幕揚申者坊主三可申付哉之旨相窺候処、毎度坊主揚申候不宜候、足輕之内三合点仕者無之候哉、以来ハ御細工方同心相勤申答三候旨被仰出、御用人三申渡。割場御奉行へ申渡候処、前々より御幕揚申者吟味仕、四人相究、御幕上ケ申候処、今日被仰出候ハ、昨日之御幕揚様宜与被出。足輕左之者也。

吉田勘助 鈴木紋大夫 金子平八 谷村義右衛門

表舞台で能の稽古があり、幕揚げについて茶坊主に命じるべきか伺うと、毎度幕揚げが坊主ではよろしくないから、足輕でよくわかつている者がいないか、最近足輕細工所同心を勤めているはずだがとの仰せがあり、御用人に申し渡した。割場奉行に伝えたと、前々より幕揚げ役を吟味して、四人を選び出し幕揚げをさせたところ、今日になって、昨日の幕揚げにお褒めの言葉を賜ったとのこと。その足輕四名は、吉田・鈴木・金子・谷村である。

30 五月十三日付香合箱書のこと〔元禄七年同八年雜記（10—4）〕

五月十三日

一、先日、地紅重御香合箱之書付為仕可申旨被仰出、香合_{地紅}与書付之下書相窺候_處、地紅之連続有之候哉之旨 御尋被成候付、御茶堂衆_江相尋候_處、地紅之事、推朱_推推紅_朱など、同じ様_三申候旨_三付、其段申上。表御納戸御道具之内_三も、御香合御香盆_三地紅有之、箱之書付_三も地紅と有之由_三 右之趣申上候_處、奥村_{小堀備中守殿}とへも相尋可申旨被仰出。右岐_江申聞候_處、右岐_江も地紅之儀、推朱など、同事様_三申様_三覚申候。弥平之丞殿などへ可相尋旨_三而、其後平之丞殿御出之時分相尋候_處、左之紙面被差越入 御覽候_處、重香合_{朱地}与可相調旨被仰出、箱之書付出来

上之。

今_江被仰聞候彫刻ノ義、考申候_處、刻花ト八牋ニ出申候。彫花トハ無御座候へ共、刻花ニテモ不苦被存候。且又、朱地モ可然候。彫漆盒トモ苦カルマシク候。則、別紙_三書付進上仕候。以上。

五月五日

奥村_江岐様

木下平丞

刻花

遵生八牋ニ高子曰、以_レ朱_ヲ為_レ地ト、刻_レ錦_ヲ。以_レ黒_ヲ為_レ面ト刻_レ花_ヲ。錦地_江花紅黒可_レ愛_{云々}。按_三此語_三申候_ハハ、刻花ト申候モ、彫花ノ意_三御座候。彫刻_ニ鑲_イツ_レモホリ申事_三御座候。以_レ朱_ヲ為_レ地ト有之候_ハハ、朱地トモ可被用候。地紅ハ倭ノ俗語_三可有御座候。朱地ノ刻花トモ可然候_ハン歟。雕花ノ字ハ未考申候。

雕漆盒ト申候ハ、長崎ニテ推朱ノ類ヲ申候由、承リ候様_三覚申候。朱地ノ雕漆盒トモ苦カルマシク候歟。盒ト申候ハ香合ノ類ノ丸キヲ申候。但シ角ニテモ香合ノ類ヲハ盒ト可申候。盒ト合トハ俗_三通用仕候ト覚申候。以上。

彫花_{考出仕候}

遵生八牋卷十五曰、秘閣ニ有_下以_三長様ノ古玉璫_ヲ為_レ之_ヲ者其多シ。而シテ彫花紫檀_ノ者モ亦常_三有_レ之_{云々}。此ハ紫檀ニテ花ヲ彫タル_ニ御座候。

朱地彫花トモ 地紅彫花トモ

右両様不苦奉存候。乍去、朱地ハ八牋ニ出所御座候。地紅ハ俗説_三可有御座候ト被存候。以上。

五月六日

奥村_江岐様

木下平丞

朱地の重香合の箱書きを地紅としても良いかと御茶道衆に尋ねたところ、堆朱堆紅などと同じように用い、小堀備中守（小堀遠州の子、正行。一六二〇〜七四）書付の用例があるとの答えが返ってきた。加賀藩の家老奥村_江岐、木下平丞（前出・順庵）に尋ねても同様の返答だったので、「重香合朱地」と書き付けたこと。

引き合ひに出された小堀正之は、父と同様茶に精通していたらしく、家光・家綱に茶入や水差棚を度々献上した旨が『寛政重修諸家譜』に見える。

『遵生八牋』は、明代、高濂による、歳時記や医学、植物、料理、茶、香、書画などについて説いた書である。一つ目の引用は「燕閑清賞箋上・論剔紅倭漆雕刻鐘嵌器皿」の「又等以朱為地刻錦、以黒為面刻花、錦地壓花、紅黒可愛」、二つ目は「燕閑清賞箋中・論文房器具・秘閣」の「秘閣有以長様古玉璫為之者其多、而雕花紫檀者、亦常有之」による。同書は尊經閣文庫に所蔵されている。

別表Ⅰ 7 御役者之覚

氏名	禄	役	流儀	所在	後出「御役者」での名前の有無
竹田権兵衛	三百石	シテ	金春	京都	○
竹田庄五郎	拾人扶持	シテ	金春	京都	○
春藤勘右衛門	判金五枚五人扶持	ワキ	春藤	京都	×
春藤万右衛門	判金五枚	ワキ	春藤	京都	○
石井仁兵衛	判金五枚	大鼓	石井	京都	×
藤本太左衛門	判金五枚三人扶持	太鼓	観世	江戸	○
山本市左衛門	判金四枚	笛	平岩	京都	×
小寺金七	判金五枚	太鼓	観世	京都	○
糟谷次郎兵衛	判金五枚	小鼓	幸	京都	○
中林七左衛門	判金五枚	小鼓	観世	京都	○
石井孫兵衛	判金四枚	大鼓	石井	京都	○
杉長左衛門	判金四枚	笛	森田	京都	○
松井十左衛門	判金四枚三人扶持	ツレ	宝生	江戸	○
平井伝右衛門	判金三枚	ツレ	金春	京都	○
山本清三郎	判金三枚	ツレ	金春	京都（奈良？）	○
山本甚右衛門	判金三枚	笛	平岩	京都	○
大蔵金右衛門	判金四枚	狂言	大蔵	京都	○
馬場弥市郎	判金三枚	狂言	大蔵	京都？	○
中村吉左衛門	判金三枚	狂言	大蔵	京都	○
石崎傳五郎	判金三枚	狂言	大蔵	京都	○
宮川七郎兵衛	判金三枚	ワキツレ	春藤	京都	○
伊東八十郎	判金三枚	地謡	金春	京都	○
藤田太右衛門	判金四枚	装束方（物着）		京都	○
武部理右衛門	判金貳枚	装束方（物着）		京都	○
平井才兵衛	判金貳枚	装束方（物着）		京都	○
諸橋喜大夫	貳拾五人扶持	シテ	宝生	金沢	○
波吉左平次	拾人扶持	シテ	宝生	金沢	○
竹中甚助	三人扶持	ワキ	春藤	金沢	○
菅浪屋次郎三郎	三人扶持	大鼓	石井	金沢	○
京屋五郎兵衛	三人扶持	笛	森田	金沢	○
北村屋円七	三人扶持	太鼓	観世？	金沢	○
袴屋傳七	三人扶持	地謡		金沢	○
額見屋四郎兵衛	三人扶持	地謡		金沢	○

別表Ⅱ 7 御役者并御徒御無用之者御細工者

役	氏名	内訳（身分）	流儀	備考
仕手	竹田権兵衛	京都	金春	廣富。金春平四郎とも。三百石（覚）
	諸橋喜大夫	金沢	宝生	式拾五人扶持（覚）
	波吉左平次	金沢	宝生	拾人扶持（覚）
	竹田庄五郎	京都	金春	竹田権兵衛女婿。拾人扶持（覚）
	波吉陸之丞	金沢	宝生	後の諸橋権進。
仕手連	上原明石之助	金沢御徒	宝生	後に吟之丞と改名。
	松井十左衛門	江戸（加賀藩お抱え）	宝生	判金四枚三人扶持（覚）
	平井傳右衛門	京都	金春	金春平四郎弟子（訓）。判金三枚（覚）
	若狭屋八之丞	町役者	宝生	
	橋爪屋新右衛門	町役者		
子方	清水勘十郎	御細工所		
	藤田小源太			
	宮川権之丞	京都	春藤	ワキツレ宮河七郎兵衛子息
	狩野小平太			
ワキ	春藤万右衛門	京都	春藤	判金五枚（覚）
	山本清三郎	京都（奈良？）	金春	竹田権兵衛のワキ。判金三枚（覚）
	山本平三郎	京都？	金春	
	竹中甚助	金沢	春藤	
	竹中甚左衛門	金沢	春藤	
	竹中梅之丞	金沢	春藤	
ワキツレ	岩崎半七	御細工所		
	宮河七郎兵衛	京都	春藤	春藤勘右衛門弟子（訓）。判金三枚（覚）
	春田屋治平	町役者		
	角屋甚右衛門	町役者		
	角屋惣四郎	町役者		享保年間に地謡方の記録あり（宝生流）
	福井屋理兵衛	町役者		
	春田屋半九郎	町役者		
	銭屋三郎兵衛	町役者		
	山東作左衛門	金沢御徒		
	中村牛之助			
笛	奥津文平	御細工所		
	山本平八	御細工所		
	杉長左衛門	京都	森田	森田宗善弟子（訓）。判金四枚（覚）
	山本甚右衛門	京都	平岩	平岩勘七弟子（訓）。判金三枚（覚）
	京屋五郎兵衛	町役者	森田	三人扶持（覚）。後に鷺田姓
	京屋市十郎	町役者	森田	
	隠岐六之進	御細工所		
	加藤惣十郎	御細工所		
	畑半十郎	御細工所		
	糟谷次郎兵衛	京都	幸	幸清五郎弟子（訓）。判金五枚（覚）
小鼓	糟谷傳次郎	京都	幸	
	中林七左衛門	京都	観世	観世新九郎弟子（訓）。判金五枚（覚）
	脇本助之丞	京都	観世	（観世）惣兵衛弟子（訓）
	二口屋九右衛門	町役者		
	加藤市之丞	御細工所		
	加藤勘左衛門	御細工所		
	加藤久四郎	御細工所		
	北嶋彦三郎	御細工所		
	石井孫兵衛	京都	石井	仁兵衛子息。判金四枚（覚）
	菅波屋二郎三郎	町役者	石井	石井仁兵衛弟子。三人扶持（覚）。後に小杉姓
大鼓	北村屋八兵衛	町役者		後に北村姓
	田上屋善七	町役者		
	太郎田屋次郎七	町役者		
	北嶋金助	御細工所	観世	

	中上権六	御細工所		
	藤本太左衛門	江戸（加賀藩お抱え）	観世	判金五枚三人扶持（覚）
	小寺金七郎	京都	観世	観世左吉弟子（訓）。判金五枚（覚）
	小寺長五郎	京都	観世	観世左吉弟子（訓）
	小寺与三次郎	京都	観世	
	北村屋門七	町役者		三人扶持（覚）。
	氷見屋太郎左衛門	町役者	観世	観世左吉弟子（加）
地謡	渡部甚五右衛門			
	池野弥市右衛門			
	斎藤善助			
	市川平右衛門			
	太田清兵衛	御細工所		
	土山惣三郎	御細工所		
	高橋吉大夫	御細工所		脇方の記録あり
	雪野友之丞	御細工所		
	中村助大夫	御細工所		
	金子喜平次	御細工所		
	伊藤八重郎	京都	金春	金春平四郎弟子（訓）。判金三枚（覚）。
	袴屋伝七	町役者		三人扶持（覚）
	額見屋四郎兵衛	町役者		三人扶持（覚）。後に藤村姓
	油屋伊兵衛	町役者		
	菓子屋孫右衛門	町役者		
	野々市屋四郎兵衛	町役者		後に松山姓
	紺屋伝右衛門	町役者		
	狩野平右衛門			
	清水谷屋七兵衛	町役者		
	表具屋孫三郎	町役者		
	袴屋武兵衛	町役者		後に津田姓
	劔屋八右衛門	町役者		
	中条屋八郎兵衛	町役者	宝生	諸橋喜大夫弟子（加）
狂言師	大蔵金右衛門	京都	大蔵	大蔵弥太郎弟子（訓）。判金四枚（覚）
	馬場弥市郎	京都？	大蔵	判金三枚（覚）
	中村吉左衛門	京都	大蔵	判金三枚（覚）
	石崎伝五郎	京都	大蔵	大蔵八右衛門弟子（訓）。判金三枚（覚）
	山上屋旦兵衛	町役者	大蔵	
	鞘師長左衛門	町役者	大蔵	
	紙屋又右衛門	町役者	大蔵	
	袴屋左平	町役者	大蔵	
	柄巻屋太兵衛	町役者	大蔵	大蔵八右衛門弟子（加）
装束方	中村団七	御細工所		針細工
	松本与四兵衛	御細工所		針細工
	藤田太右衛門	京都		判金四枚（覚）
	武部理右衛門	京都		判金貳枚（覚）
	平井才兵衛	京都		判金貳枚（覚）
	大野屋久兵衛	町役者		
	飴屋加兵衛	町役者		
御貸装束方	金子喜左衛門	御細工所		小刀細工
	中村新五兵衛	御細工所		針細工
	水谷金右衛門	御細工所		針細工
	不嶋源六	御細工所		針細工

略号 （覚）御役者之覚（1-3）
（訓）能之訓蒙図彙
（加）加越能文庫蔵資料

別表Ⅲ 12～13 役者一覧

役	記載名	姓・名	流儀	座、所属	5/29 条	閏 5/21 条	閏 5/27 条	7/19 条	7/22 条	7/26 条	7/27 条	8/9 条	備考
シテ	金剛 (大夫)	又兵衛長頼	金剛	江戸金剛座 大夫	賀茂 雲林院 是界 (白是界)								35 歳
シテ	政丞	宝生	宝生	江戸宝生座 大夫	頼政 禪師曾我	大佛供養 石橋		道成寺	天鼓 安宅	寝覚 熊坂		二人静 (連) 鐘引 橋弁慶 (後)	18 歳 元禄 12 没
シテ	宝生 (大夫)	友春	宝生	江戸宝生座 大夫	江口 富士太鼓	松風 高野物狂 (御乞能) 藤戸	三輪	羽衣 融 (御乞能) 通小町	東北 鶺鴒 (御乞能) 鶺鴒小町	藤 蟬丸 (御乞能) 放下僧	鉄輪 (仕舞) 東北 (仕舞) 自然居士	二人静 乱	42 歳
シテ	吉之助	宝生	宝生	江戸宝生座 大夫	殺生石	俊成忠度	経政	車僧	西王母	小袖曾我	狸々 (仕舞) 花月	鷺	16 歳
シテ	喜大夫	諸橋	宝生	加賀藩	祝言			東岸居士	祝言	知章	(仕舞) 西行桜	白鬚	
シテ	七郎	金春 (重栄)	金春	江戸金春座 大夫		鶺鴒 箆太鼓							30 歳
シテ	喜内	服部	宝生	江戸宝生座 大夫		鉄輪					(仕舞) 芦刈		36 歳
シテ	陸丞	波吉	宝生	加賀藩		祝言	祝言	祝言 (呉服)	現在鶴	祝言 (養老)		簞	
シテ	求馬	大蔵	金春				養老 海士						33 歳
シテ	金春 (大夫)	八郎 (元信)	金春	江戸金春座 大夫			采女 富士太鼓	関寺					69 歳
シテ	五郎大夫	宝生	宝生	江戸宝生座 ツレ			羅生門 長良						21 歳
シテ	八左衛門	金春 (安成)	金春	江戸金春座 大夫				東方朔 小督					33 歳 元禄 10 没
シテ	左大夫	宝生	宝生	江戸宝生座 大夫					八嶋 桜川				32 歳
シテ	牧野大蔵殿	牧野		素人。 牧野成貞孫							鶴亀 橋弁慶 是界 (仕舞) 笠の段		
シテ	御	前田綱紀	宝生	素人。加賀 藩主							(仕舞) 春 日龍神 (仕舞) 小壇	龍田 小督	52 歳
シテ	内記	前田利直		素人。大聖 寺藩主								是界	23 歳
ツレ	八丞	若狭屋	宝生	加賀藩お抱 えツレ 町役者								是界 (ツレ)	

役	記載名	姓・名	流儀	座、所属	5/29 条	閏 5/21 条	閏 5/27 条	7/19 条	7/22 条	7/26 条	7/27 条	8/9 条	備考
ワキ	権右衛門	進藤 (益信)	進藤	江戸観世座 付	賀茂 金剛		養老 羅生門 富士太鼓						48 歳
ワキ	甚左衛門	竹中	春藤	加賀藩お抱 え	頼政 富士太鼓	俊成忠度 高野物狂	経政 海士	東岸居士	八嶋 鶺鴒	知章	鶴亀	乱	
ワキ	彦九郎	高安?	高安?		江口 雲林院 禪師曾我	石橋 藤戸	采女 三輪 長良		東北 現在鶴 安宅 (御乞能) 鶺鴒小町			白髭 松虫 小督	元禄期南都出 勤記録に 「高安彦九郎」 あり。 但し表章氏は 誤写かとする

ワキ	清三郎	山本		加賀藩お抱え	殺生石祝言			車僧羽衣(御乞能)通小町	西王母祝言	藤	鉄輪	鐘引	
ワキ	源七	春藤	春藤	江戸金春座付		鶴祭松虫		関寺融		寝覚蟬丸(御乞能)放下僧			43 歳
ワキ	勘左衛門	中村	春藤	土佐藩お抱え(京都)		大仏供養 箆太鼓 鉄輪							春藤源七弟子
ワキ	清兵衛					祝言			天鼓	祝言(養老)	是界	箆	
ワキ	吉大夫	高橋		加賀藩細工所			祝言	祝言(呉服)	桜川	熊坂	狸々		
ワキ	新丞	宝生	下宝生	江戸宝生座ワキ				東方朔 道成寺 小督				二人静 龍田 鷺	50 歳
ワキ	内匠	前田		素人か。加賀藩士前田孝之?								是界	

役	記載名	姓・名	流儀	座、所属	5/29 条	閏 5/21 条	閏 5/27 条	7/19 条	7/22 条	7/26 条	7/27 条	8/9 条	備考
笛	又六	一噌	一噌	江戸宝生座付	賀茂雲林院	松風石橋		道成寺融	東北天鼓(御乞能)鸚鵡小町			二人静小督乱	30 歳
笛	牛之助	中村		加賀藩お抱え	頼政是界祝言	箆太鼓鉄輪	経政						
笛	庄兵衛	森田	森田	江戸観世座付	江口富士太鼓		采女三輪			寝覚藤(御乞能)放下僧		龍田鷺	四世時喬 38 歳
笛	平八	山本		加賀藩細工所	殺生石 禪師曾我	大佛供養(御乞能)藤戸	長良祝言	車僧祝言(呉服)	八嶋現在鶴 鸚鵡祝言	知章熊坂	鉄輪是界	箆 鐘引 是界	
笛	忠次郎	笹井(佐々井)	森田	江戸金春座付		鶴祭高野物狂						白髭松虫橋弁慶(後)	33 歳
笛	文平	興津		加賀藩細工所		俊成忠度祝言	羅生門海士	東方朔東岸居士(御乞)通小町	西王母桜川安宅	小袖曾我蟬丸祝言(養老)	鶴亀橋弁慶		
笛	源二郎	竹中		江戸観世座付			養老富士太鼓	羽衣小督					39 歳
笛	宗古(宗光)	一噌	一噌	江戸役者。				関寺					京都に屋敷あり。71 歳。元禄 16 没
笛	作左衛門	山東		加賀藩お抱え。徒。							狸々		
小鼓	六蔵	大倉	大倉	江戸金春座付	賀茂富士太鼓								6 世宣清。元禄 10 没 下記長右衛門婿養子
小鼓	七左衛門	中林	新九郎	加賀藩お抱え。京都	頼政	大佛供養鉄輪	養老海士	東方朔東岸居士	西王母安宅	小袖曾我	鶴亀是界	白髭小督	

小鼓	新九郎	宝生(観世)	新九郎	江戸宝生座付	江口 雲林院		三輪	道成寺 (御乞) 通小町	東北 天鼓 (御乞能) 鸚鵡小町			二人静 鷺	元禄九年まで 宝生姓 関5/21は病欠 32歳。
小鼓	六之進	隠岐		加賀藩細工 所	殺生石 祝言	箆太鼓	経政	小督	桜川	寝覚 熊坂	橋弁慶	松虫 橋弁慶	
小鼓	惣十郎	加藤		加賀藩細工 所	是界	俊成忠度	羅生門 祝言	車僧	鸚鵡	知章	鉄輪	鐘引 是界	
小鼓	半十郎	畑		加賀藩細工 所	禪師曾我	祝言	長良	祝言(呉服)	現在鶴	祝言(養老)	猩々	簾	
小鼓	四郎五郎	幸?	幸?	江戸金春座 付?		鶉祭 (御乞能) 藤戸							幸清六(8世正 貞)の若名か 8世であれば 24歳。
小鼓	清六	幸	幸	江戸金春座 付		松風 高野物狂	采女 富士太鼓			藤 蟬丸 (御乞能) 放下僧		龍田 乱	上記四郎五郎 (清六)か もしくはその養 父7世清六か 7世であれば 36歳
小鼓	五郎左衛門	幸	幸	江戸観世座 付		石橋		羽衣 融					※元禄9より 宝生座
小鼓	長右衛門	大倉	大倉	江戸金春座 付				関寺					64歳。元禄13 没。元禄7よ り江戸在住
小鼓	助之丞	脇本	新九郎	加賀藩お抱 え。京 都 (観世惣兵衛 弟子)					八嶋 祝言				
大鼓	三助	金春	金春	江戸金春座 付	賀茂	鶉祭 石橋	富士太鼓	道成寺 融	西王母 天鼓 (御乞能) 鸚鵡小町	蟬丸		小督 乱	24歳
大鼓	傳蔵	金春	金春	加賀藩お抱 え江戸	頼政	俊成忠度	養老	東岸居士	祝言	知章		是界	12歳
大鼓	市郎兵衛	葛野	葛野	江戸観世座 付	江口 富士太鼓	松風 高野物狂				藤 (御乞能) 放下僧		龍田 鷺	45歳
大鼓	久四郎	加藤		加賀藩細工 所	殺生石	箆太鼓	長良	小督	桜川	寝覚	橋弁慶	松虫	
大鼓	三郎右衛門	金春	金春	江戸金春座	雲林院	(御乞能) 藤戸	采女	関寺	東北			二人静	59歳
大鼓	勘左衛門	加藤		加賀藩細工 所	是界	鉄輪	海士	東方朔	安宅		鶴亀 是界	白髭 橋弁慶(後)	
大鼓	次郎三郎	菱浪屋 (小杉)	石井	加賀藩町役 者	禪師曾我	大佛供養	経政 祝言	車僧	現在鶴 鸚鵡	祝言(養老)	鉄輪	鐘引	
大鼓	彦三郎	北嶋		加賀藩細工 所	祝言	祝言	羅生門	祝言(呉服)	八嶋	熊坂	猩々	簾	
大鼓	弥三郎	宝生	観世	江戸宝生座 付			三輪						観世新九郎 (6世)子息。 22歳
大鼓	平三郎	高安	高安	江戸金剛座 付				羽衣 (御乞) 通 小町					32歳
太鼓	左吉	観世	左吉	江戸観世座 付	賀茂 雲林院		養老 三輪	道成寺 融				龍田 鷺 乱	33歳 元禄8没。
太鼓	太郎左衛門	藤本	左吉	加賀藩お抱 え。江戸	殺生石	鉄輪	海士	東方朔 羽衣	西王母	寝覚 藤	鶴亀 是界	白髭 是界	
太鼓	権六	中上		加賀藩細工 所	是界 禪師曾我		長良	祝言(呉服)	現在鶴 祝言	熊坂	猩々		

太鼓	金助	北嶋	左吉	加賀藩細工所	祝言		羅生門 祝言	車僧	鶺鴒	祝言(養老)	鉄輪	鐘引	
太鼓	三郎左衛門	宝生	宝生	江戸宝生座付		鶺鴒 石橋							太鼓宝生家は江戸後期に断絶 44歳

役	記載名	姓・名	流儀	座、所属	5/29条	閏5/21条	閏5/27条	7/19条	7/22条	7/26条	7/27条	8/9条	備考
狂言	仁右衛門	鷺宗悦	鷺	江戸観世座付	あそふよね市			はき大名 したうほうかく	穴穂猿 大般若 つうゑん				元禄7.8.21 没。59歳
狂言	権丞	鷺	鷺	江戸観世座付	鼻取すまふ								
狂言	弥太郎	大蔵縁虎	大蔵	江戸金春座付		目近 釣狐 くし罪人				鍋八はち 蚊すまふ しんはい すあふおとし			43歳 宝永2没
狂言	弥市郎	馬場	大蔵	加賀藩お抱え		茶つほ	秀句傘	ふんそう	音曲簪			鬼のまゝ子	
狂言	傳五郎	石崎	大蔵	加賀藩お抱え(京都)		飛越	そら腕	すはしかみ	悪太郎	柿山伏	舟ふな	福神	大蔵八右衛門 弟子
狂言	八右衛門	大蔵成虎	大蔵	江戸金春座付			庖丁むこ 連歌盗人 三人かたわ						八右衛門家二世。44歳 宝永6没
狂言	長大夫	大蔵	大蔵	江戸宝生座付				末廣かり 子盗人 (道成寺アイ)				麻生 穴穂猿 釣狐 祐善	7/19 道成寺 アイ【御能方】 より補う 32歳
狂言	平右衛門	石崎	大蔵	京都役者								花おり	上記石崎傳五郎と同居。親子か 大蔵八右衛門弟子

※備考欄の年齢については樹下文隆氏「影印・解題『元禄十一年能役者分限帳之控』」(『国文学研究資料館紀要』19号)他を参考に、元禄七年時の年齢(数え年)を算出した。